東かがわ市埋蔵文化財調査報告　第２集

神　越　５　号　墳

― 民間土地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

2006年３月

東かがわ市教育委員会

東かがわ市埋蔵文化財調査報告　第２集

神　越　５　号　墳

― 民間土地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

2006年３月

東かがわ市教育委員会

序

東かがわ市は平成15年４月に、大内町・白鳥町・引田町が合併して誕生しました。新世紀の始まりとともにその名を歴史に刻んだ東かがわ市ではありますが、それぞれの町には先人たちの築いた文化遺産が数多く残されています。大地に刻まれ今日まで伝えられてきたその姿は時代時代を生きた人々の営みであり、そこに我々が今在る証を見いだすことができるのです。東かがわ市教育委員会ではこうした文化遺産を、郷土の歴史と文化を理解するうえで大事と考え、適切に保存し広く活用していくことに取り組んでいます。

今回報告する神越５号墳は原間池南縁の丘陵地に所在する、古墳時代後期の古墳であります。近年の調査によってこの与田川と湊川に挟まれた平野や丘陵地には、弥生時代からの遺跡や古墳が数多く、形成されていることが判明しております。東讃を代表する原間遺跡や成重遺跡などの拠点的集落跡とともに、間際の丘陵を葬送の地として継起的に営んだ様相を辿ることのできる重要な地域といえます。本報告書が、埋蔵文化財の保護の一助になるとともに、地域の歴史研究においても活用していただければ幸いと存じます。

最後になりましたが調査に際し、地元の皆様をはじめ関係各位より、多大なるご理解・ご協力を賜りましたことに対して、衷心より感謝の意を表します。

平成18年３月

東かがわ市教育委員会

教育長　**桑島　正道**

例　言

1．本報告書は、東かがわ市教育委員会が平成15年度に実施した、神越５号墳の発掘調査報告書である。
2．調査の実施にあたっては東かがわ市教育委員会が調査主体となり事務を、調査実務は東かがわ市教育委員会の依頼を受け大川広域行政組合埋蔵文化財係が実施した。
3．本報告書の作成は引きつづき大川広域行政組合埋蔵文化財係が実施した。作業総括および執筆・編集は阿河鋭二が担当した。遺構・遺物の製図は多田歩、遺物整理は間嶋京子によるところが大である。
4．本報告書で用いる方位の北は、磁北である。縮尺は掲載図面内にスケールで示した。
5．挿図の一部に国土地理院地形図「三本松」(1/25,000) を使用した。
6．本報告書の中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1998年度版』を使用して表す。
7．調査及び報告書作成に際しては、地権者六車繁一氏並びに事業者（株）松尾総合土木のご理解とご協力を得た。記して謝意を表したい。

目　次

序
例言
第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1
第２章　立地と環境
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　調査の成果
　第１節　調査前の状況 …… 7
　第２節　墳丘 …… 7
　第３節　埋葬施設 …… 10
　第４節　遺物出土状況 …… 14
　第５節　出土遺物 …… 14
　第６節　その他の遺構 …… 21
第４章　まとめ
　第１節　古墳の時期について …… 22
　第２節　装飾付須恵器について …… 23
　第３節　小結 …… 25
付　　載　樋端北遺跡について …… 26
出土遺物観察表 …… 27
報告書抄録

挿図目次

第１図　東かがわ市神越５号墳位置図 …… 2
第２図　周辺遺跡位置図 …… 4
第３図　原間池周辺遺跡位置図 …… 5
第４図　調査区地形測量図 …… 8
第５図　調査区南側土層図 …… 9
第６図　周溝状遺構遺物出土状況 …… 9
第７図　埋葬施設検出状況 …… 11
第８図　横穴式石室平・断面図 …… 11
第９図　墳丘西側及び石室断面図 …… 12
第10図　横穴式石室東側法面土層図 …… 13
第11図　横穴式石室西側墓道土層図 …… 13
第12図　横穴式石室遺物出土状況図 …… 14
第13図　玄室出土遺物実測図 …… 15
第14図　周溝状遺構出土遺物実測図① …… 16
第15図　周溝状遺構出土遺物実測図② …… 17
第16図　崩落土出土遺物実測図 …… 18
第17図　鉄製品実測図 …… 19
第18図　装身具実測図 …… 20
第19図　砥石実測図 …… 20
第20図　その他の遺構平・断面図及び出土遺物実測図 …… 21
第21図　樋端北遺跡地形測量図 …… 26

図版目次

図版１－１　調査前遠景
図版１－２　調査前近景①
図版１－３　調査前近景②
図版２－１　周溝状遺構遺物出土状況①
図版２－２　周溝状遺構遺物出土状況②
図版２－３　調査区東法面埋葬施設検出状況
図版３－１　横穴式石室調査状況①
図版３－２　横穴式石室調査状況②
図版３－３　横穴式石室調査状況③
図版４－１　横穴式石室調査状況④
図版４－２　横穴式石室調査状況⑤
図版４－３　横穴式石室調査状況⑥
図版５－１　調査区西側土層墓道
図版５－２　調査後近景
図版５－３　調査後崩落土精査状況
図版６－１　出土遺物①（須恵器）
図版６－２　出土遺物②（鉄製品他）
図版７　出土遺物

第１章　　調査に至る経緯と経過

今回報告する神越５号墳及び樋端北遺跡は旧白鳥町白鳥字寺前に所在する。平成９年度より四国横断高速自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が本格化し、当該地区周辺の平野部や丘陵地には弥生時代から古墳時代を中心とした数多くの集落遺跡や古墳（群）の所在が確認され、調査が実施されたものである。このような状況のなか今回の調査の契機となったのは平成12年度に、隣接する原間池堤防改修用採土がおこなわれることにより、緊急的に埋蔵文化財の所在有無確認のための試掘調査を実施したものである。この試掘調査は合併以前の旧白鳥町教育委員会が平成13年１月におこない、結果として神越５号墳をはじめとする遺跡の所在を確認したものである。この結果をもとに協議をおこない、掘削開始地点を下方にずらせることにより、発掘調査を行わず現状の維持を図ったものである。この後、土採取事業者が変更し断続的に作業を実施していく過程において、ある程度の内容把握のため現況の地形測量を平成13年５月に実施した。これをもとに再度事業者に遺跡の有無を確認するとともに、現状保存の取扱いについての協議をおこなった。

東かがわ市制がはじまった平成15年５月になり、香川県教育委員会文化行政課より法面が崩落し石室石材が転落・露出しているという連絡があり、この事実を確認したものである。これを受け東かがわ市教育委員会では香川県教育委員会文化行政課と協議し、崩落が進行していくことが懸念されたことからこれ以上の現状保存は不可能であり、発掘調査による早急な記録作成が必要との判断に至ったものである。この認識のもと東かがわ市教育委員会では今回の採土事業者である（株）松尾総合土木より、工事の内容と経過についてうかがうとともに、今後の発掘調査の必要性とその実施方法について協議をおこなった。この結果、神越５号墳の記録保存を目的とする発掘調査を実施することに合意し、調査範囲については採土事業の実施地内に限るものとした。発掘調査は東かがわ市教育委員会が調査主体となり、調査作業員や機械などについては（株）松尾総合土木に供与してもらうこととなった。なお、発掘調査の実施にあたっては、東かがわ市教育委員会より依頼を受けて、大川広域行政事務組合埋蔵文化財係が職員を派遣し、調査実務を担当する形式で行うこととした。

調査は平成15年７月３日より伐開作業を始め、崖面のため作業は慎重に行いながらも地形測量・遺構掘り下げ・石室検出・実測をおこない、７月18日に撤収作業を完了した。

調査体制は下記のとおりである。

（平成15年度調査体制）

東かがわ市教育委員会生涯学習課

課　　長	長町　廣幸
主任主査	成岡　正利

大川広域行政組合埋蔵文化財係

主任主事	阿河　鋭二
技 術 員	間嶋　京子

（平成17年度整理体制）

東かがわ市教育委員会生涯学習課

課　　長	野網　誠二
主任主査	木村　　靖

大川広域行政組合埋蔵文化財係

主任主事	阿河　鋭二
主　　事	松田　朝由
技 術 員	多田　　歩
技 術 員	間嶋　京子

第２章　　立地と環境

第１節　地理的環境

東かがわ市は引田町・白鳥町・大内町の３町が平成15年４月に合併して誕生した市である。香川県の東端に位置するその市域は東西に21.6㎞・南北に13.4㎞以上に及び、面積は約153.35㎢を測る。東は徳島県鳴門市に、南は徳島県板野郡と西は同じく合併で誕生したさぬき市と市域を接している。その地勢をみると市域南部の県境付近には阿讃山脈に連なる龍王山（標高475m）や東女体山（標高667m）が連なり、北側にはこれらから延伸している丘陵性台地が市域の南半を占めている。また、台地の縁部にはこれらを浸食した谷筋には狭小な平野部がみられる。市域の中ほどには河川の堆積によって形成された沖積平野が広がっている。河口には三角州が発達しており、海浜の砂堆とあわせ現在では市街地が広がっている。また、これらの平野部には島状に独立状丘陵が点在している。市内を流れる主要河川は阿讃山脈を源とし、与田川・湊川や馬宿川などが各平野部を北流している。河川は台地を抜けると蛇行を繰り返して瀬戸内海に注ぎ込み、平野部にはかつての氾濫の痕跡を見て取ることができる。

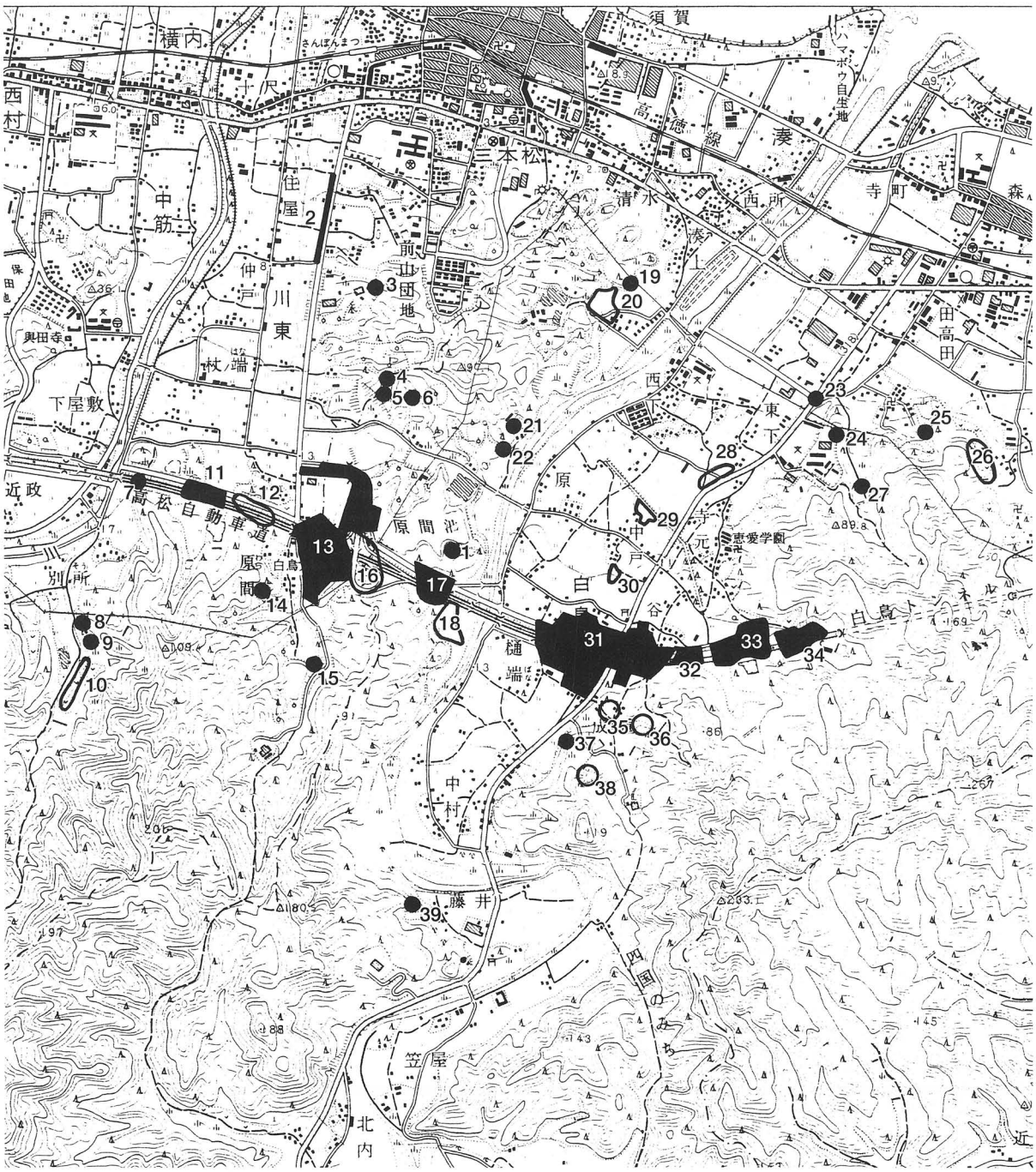
神越５号墳が所在する寺前地区は平野部におけるかつての大内町と白鳥町の境にあり、東側すぐには湊川が貫流している。南側には台地から延びる丘陵の舌端が八つ手状に張りだしている。また北側では独立状を呈する低丘陵の前山丘陵が展開し、これらに画された低地部は谷状地形をなしている。この谷状地形はかつて西側の原間地区から東に抜ける河道で、江戸期にこれを堰き止め現在の原間池を構築したものとされる。神越５号墳が立地するのは原間池南岸の丘陵舌端の斜面上である。

第１図　東かがわ市神越５号墳位置図

第２節　歴史的環境

近年に行われた四国横断自動車道建設工事などに伴う大規模な事業などにより、東かがわ市内においても新たに重要な成果が数多くえられることとなった。旧石器時代から縄文時代にかけての遺構遺物の明確な様相について把握することのできた遺跡は尚ごく僅かにとどまる。これまでのところ旧大内町を貫流する与田川流域の水主地区や山間部などにおいて、有舌尖頭器や環状石斧・独鈷石などが採取されており、金比羅山遺跡では縄文時代前期と考えられる玦状耳飾りなどの装飾品が出土している。また原間遺跡では縄文時代後期頃とされる川漁の仕掛けの一部が河道より検出されている。縄文時代晩期になると金比羅山遺跡などにおいて、多量の突帯文土器やサヌカイト原材が出土している。弥生時代に入って遺跡数は増加していく傾向にあるが、前期については未だ資料的な制約がある状況で、農業基盤整備事業に伴う調査によって多量の土器が出土した落合遺跡が知られているくらいである。やや下って中期後半から後期にかけては平野部に大規模な遺跡が形成されていくようになる。寺前地区を挟んだ低地部に原間遺跡や成重遺跡などが所在し、検出された遺構や遺物は拠点的集落遺跡の様相を示すものと考えられる。また、成重遺跡では一部に墓を含む集石状遺構が多数発見されるとともに、周溝墓や土器棺墓もあり墓制の上からでも注目される。また、弥生時代中期後半には丘陵谷地形の緩斜面地に集落跡が検出されている。旧引田町では庵の谷遺跡や沙田谷川下池遺跡・鹿庭遺跡、旧白鳥町では成重遺跡の東側に池の奥遺跡などが調査されており、庵の谷遺跡や池の奥遺跡では石鏃のほか多量のサヌカイト製石器や道具類が出土しており、石器製作がおこなわれたことが窺われる。後期から終末期にかけて集落遺跡は平野部を中心に展開するとともに、集落跡を取り囲む丘陵上には土坑墓や土器棺墓などからなる墳墓群の立地がみられるようになる。代表的な遺跡としては原間池周辺の丘陵上に集中しており、金比羅山遺跡・塔の山南遺跡・樋端遺跡・樋端墳丘墓などが挙げられる。樋端遺跡では丘陵斜面に各30基をこえる数の土坑墓と土器棺墓が整然と群集するもので、内行花文鏡の破鏡の出土をみている。樋端墳丘墓は地山整形による直径18m前後の墳丘をもち、墳丘中央には竪穴式石槨があり墳裾に木棺墓が、周溝内には土器棺墓と土坑墓などの埋葬施設をもった終末期の特定家族クラスの墳墓である。

古墳時代の讃岐は前期古墳がとくに多く造られていることが特徴であるが、市内においてはこれまでのところ大日山古墳（１号墳）が唯一のものである。大日山古墳は旧大内町と白鳥町の境がはしる前山山塊南西丘陵に所在するもので、県内で最も東に位置する前方後円墳である。これまでに測量調査しか実施されていないが、竪穴式石槨内にさぬき市火山産の白色凝灰岩を使った石棺の所在が想定されている。また、上方の尾根続きには箱式石棺（２号墳）が所在している。中期になると大日山古墳周辺の丘陵上に、竪穴系の埋葬施設をもった円墳の築造が増してくる。なかでも原間６号墳を中心とした古墳群は原間遺跡を挟む東西両側の丘陵尾根上に、10基近くの古墳が築かれている。また、原間６号墳は丘陵頂部に築かれた中期前半の円墳で、直径は約30mを測り埋葬施設は木槨木棺とされる。内部より短甲や三累環頭大刀や鉄製農工具が出土している。埋葬施設・出土遺物ともに類例が数少なく、朝鮮半島とのつながりを考えさせる重要な古墳である。後期になると埋葬施設に横穴式石室をもった小規模な円墳が築造されるようになる。古墳は丘陵や尾根ごとに数基ほどまとまって築造されるものと、単独で所在しているものがある。原間１号墳や藤井古墳・川北古墳などは後者の例で、使用される石材など規模の大きいもので上位層の様相をよく残している。この時代の集落遺跡は希薄なものであるが、原間遺跡では５世紀後半の竪穴住居跡や大壁建物跡などが検出されており、住屋遺跡では６世紀から７世紀にかけての住居跡が多数調査されている。成重遺跡や善門池西遺跡などでも６世紀半ば頃の遺構が検出されている。また、城泉遺跡では須恵器を少量とともに多くの土師器が出土しており、海浜部の松原遺跡では製



1．神越５号墳
2．住屋遺跡
3．前山丘陵須恵器出土地
4．大日山１号墳
5．大日山２号墳
6．高松廃寺跡
7．塔の山南遺跡
8．別所古墳
9．別所遺跡
10．飛谷遺跡
11．西谷遺跡
12．原間古墳群西支群
13．原間遺跡
14．原間１号墳
15．幸代池西遺跡
16．原間古墳群東支群
17．樋端遺跡
18．神越遺跡
19．杉尾神社古墳
20．白鳥廃寺跡
21．樋端廃寺跡
22．北原庵の谷古墳
23．城泉遺跡
24．白鳥城跡
25．秋葉神社古墳
26．赤坂古墳群
27．田ノ口池の奥遺跡
28．寺元遺跡
29．藪西遺跡
30．中戸遺跡
31．成重遺跡
32．谷遺跡・谷窯跡
33．善門池西遺跡
34．池の奥遺跡
35．四房遺跡
36．成重北遺跡
37．観音谷古墳
38．成重南遺跡
39．藤井古墳

第２図　周辺遺跡位置図

1．神越５号墳
2．原間２号墳
3．原間５号墳
4．原間６号墳
5．樋端１号墳
6．樋端２号墳
7．樋端墳丘墓
8．神越１号墳
9．神越２号墳
10．樋端遺跡
11．神越３号墳
12．神越遺跡
13．神越６号墳
14．神越４号墳
15．樋端北遺跡
16．神越桃山古墳

第３図　原間池周辺遺跡位置図

塩土器が出土している。

古代律令制下において市域は大内郡に属し、引田郷・白鳥郷・与泰郷・入野郷が設置された。大内や引田の平野部には条里型地割がよく残されており、律令国家体制下での開発を見て取ることができる。また、官道としてその具体的位置は確定しないが東西に南海道が貫いている。郡内には南海道の引田駅が配置されており、残された地名などから今の馬宿あたりに駅家が推定されている。ただ、引田川北遺跡では主軸を揃えた古代の掘立柱建物跡12棟をはじめ、緑釉陶器などの貴重な遺物が出土しており、本遺跡を駅家関連遺構とする見解もあり検討を要する。他にも大内平野の西奥にあたる中山地区坪井遺跡からは掘立柱建物跡や溝が検出されており、寒川郡との境をなす位置にあることから南海道に関連するものと考えられている。また、讃岐国内の地方行政機構として郡衙はこれまでのところ全く不明であるが、住屋遺跡では奈良時代のものと推定される古代官人の官位を示す帯金具が出土しており、遺跡を含む周囲に所在していた可能性が考慮される。讃岐には古代寺院が他国より多く造営されているが、郡内では白鳥廃寺が唯一のもので湊川河口西岸の谷間の低地部に位置している。これまでの調査で土壇とと

もに心礎石などが検出されており、南滋賀廃寺式の伽藍配置が想定されている。瓦などが多く出土しているが八葉複弁蓮華文軒丸瓦や四重弧文軒平瓦などは、白鳳期にさかのぼるものとされる。また、隣接する北側丘陵斜面には焼土の痕跡があるとされ、瓦窯の所在も考慮されている。

中世について城館を主体にみていくと、これまで知られていた引田城址や虎丸城址の他にも、近年の悉皆調査によって城守山城跡や黒羽城跡・白鳥城跡の所在が確認された。引田城址は引田地区にある瀬戸内海に突き出た通称城山に所在する。三方を海に囲まれ、陸続きの西側も泥濘地であることから本来は攻めるに難い要害地に築かれた平山城である。その地勢は南側に位置する中世以来の湊町である引田を風除け地として最適なもので、引田が良好として瀬戸内海交通の要衝となった一要因でもある。引田城址は山頂を中心に周囲を石垣をめぐらし、北郭には高さ８ｍを測る高石垣が威容を誇る。文献では戦国期より在地寒川氏や阿波三好氏の部将の在城が記されるが、現状の様相は天正15（1587）年に讃岐に入部した生駒氏によって一国一城令までの間、東讃支配の拠点として整備されたものである。平成16年度の内容確認調査によって、曲輪内には石垣・礎石や櫓台または虎口や土堤などの遺構が良好に残されていることが確認されており、遺物には高松城出土例とほぼ同様な軒平瓦の他に、鯱瓦や宝珠文を押印した瓦片が出土している。虎丸城址は大内水主地区の標高400ｍをこえる虎丸山山頂に築かれた山城で、山頂主郭から四方に延びる尾根筋には小曲輪が連続し、堀切や畝状竪堀群などによって防御が固められている。戦国時代後期の長宗我部氏侵攻時には在地方三好氏・十河氏の最後の拠点となった。虎丸山北麓には「城の内」という地名もあり、常用居館の存在が推測されている。城守山城跡は大内郡と寒川郡の境付近の丘陵上に所在するが、文献には記されておらず明確な築造期や主体者などは不明である。標高約226ｍの城守山山頂に主郭があり、東西につづく二つの頂部にも曲輪が築かれている。連絡する尾根稜線には土橋を掘り残した堀切が残されている。山頂以外にも北側山腹に堀切状の地形がみられ、さらに城域が広がることも想定される。黒羽城跡は引田城址から平野を挟んで南向かいにあたる山塊から張りだした尾根先端に位置する。ちょうど馬宿川が平野に抜けた間際にあたり、細長い尾根は三方が急斜面となっており要害地である。尾根頂部は幅の狭い平坦地がつづき、南西先端に比高差２ｍ前後の高くなった小曲輪がある。ほかに白鳥城跡は平野にある独立状山塊から突き出た尾根上に所在する。北側には後背湿地が広がり、防御的な役割を果たす。遺構は判明しないが、周囲には「城泉」「城ガ端」といった地名が残る。寒川氏配下の白鳥玄蕃が城主と伝えられる。また、低地にある居館としては大内土居地区にある居館跡は水田の地割りからその所在が認められるもので、方一町はある方形区画が残されている。

参考文献

『大内町史』1985　大内町史編集委員会
『白鳥町史』1985　白鳥町史編集委員会
『引田町史』1995　引田町教育委員会
『香川県中世城館詳細分布調査報告』2003　香川県教育委員会
『第11回特別展　讃岐の古瓦展』1992　高松市歴史資料館
木下晴一「引田城下町の歴史地理学的検討」『研究紀要Ⅶ』1999　（財）香川県埋蔵文化財調査センター

第３章　　調査の結果

第１節　調査前の状況

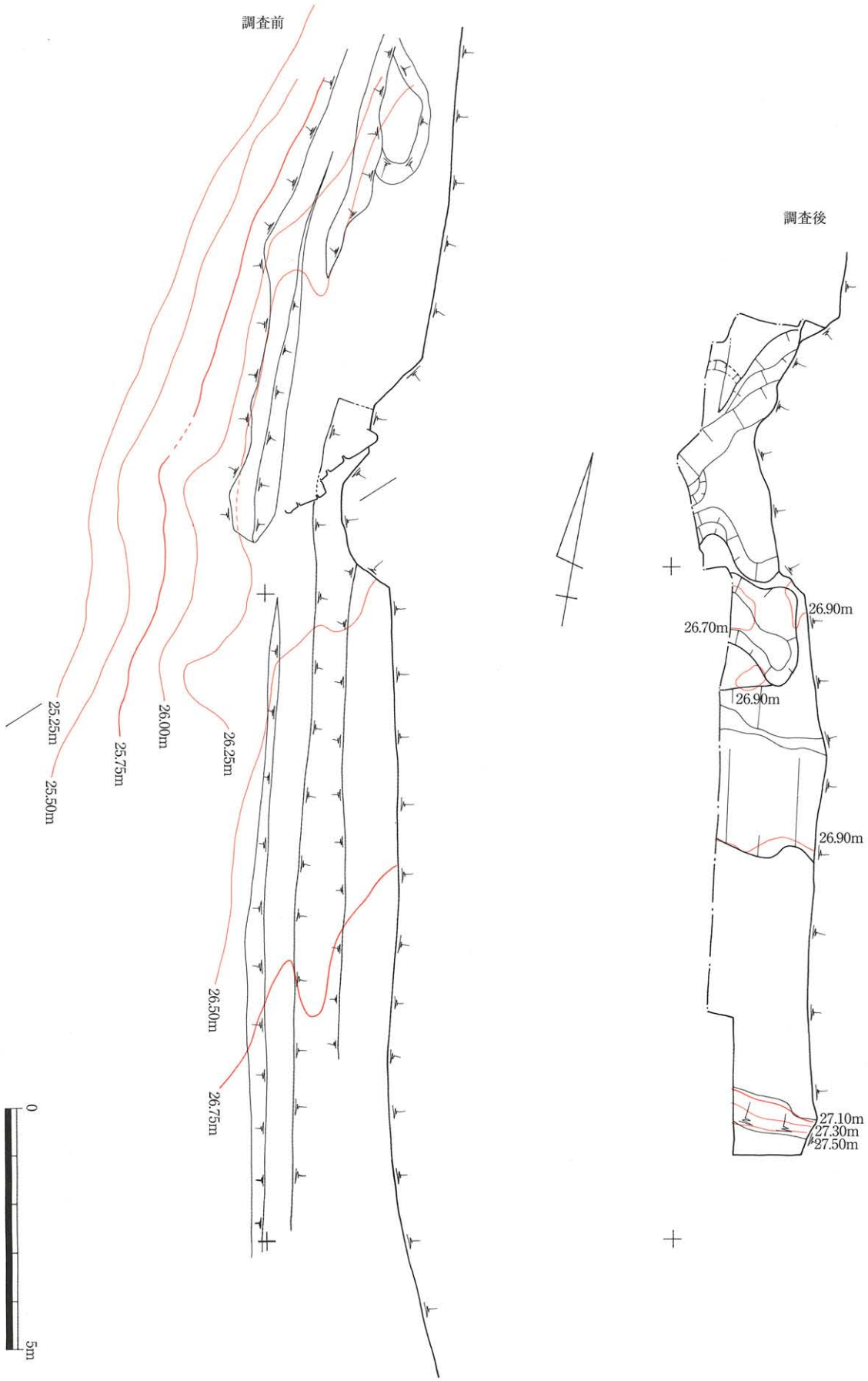
神越５号墳は原間池南岸に位置する低丘陵地に所在している。この丘陵地は湊川に沿って南方の山塊より延びてきているものである。ちょうど丘陵地の南側には鞍部があり、間道がはしっている。また、北方に所在する前山山塊との間にある原間池はかつて谷筋で、江戸期にこれを堰き止め溜池として供用したものである。このような状況のため一見すると独立状丘陵を呈しているものである。丘陵地内には３つの頂部があり、それぞれ四方に向け小枝尾根を延ばしている。これら頂部にはそれぞれ樋端墳丘墓・神越１号墳が所在しており、斜面部にも樋端遺跡や神越２号墳などが在って、墳墓や古墳が密に展開している丘陵である。神越５号墳は北側頂部からＶ字に延びる小枝尾根の西側に築造されている。尾根は頂部から北西に向かって急傾斜となって下り、途中なだらかになって前端部に至る。この２本の小枝尾根の稜線から内側の斜面地は畑地として利用されており、現状の稜線ではおおむね上下２段の平坦地がこしらえられていた。また、上段平坦地には芋類貯蔵用の穴蔵が掘り込まれており、周辺には古墳石室に使用されていたであろう石材が露出している。このような状況において、平成12年度の試掘調査時に下段平坦地にあたる当該地のやや北側において、神越５号墳を確認したものである。地表のほぼ直下に石材積石があり、須恵器破片が出土したことから横穴式石室の所在を想定したものである。すでに東側は採土工事によって掘削が行われていたが、法面には石材の露出は認められずこの時点では、石室については崩落していないものとされた。

やや精確さを欠くが旧地形図をもとに図上で復元すると、神越５号墳は小枝尾根稜線からはややずれて西側斜面に立地する可能性が高いとおもわれる。ここでは稜線上よりいくらかは下ったものとして捉える。試掘調査の段階においては稜線上に所在する感覚であったが、尾根稜線は平坦地化のためかなりの掘削が行われたものと考えられる。調査は対象範囲を地境から東側のみとし、石室確認部分とあわせ南側範囲も掘り下げをおこなったものである。

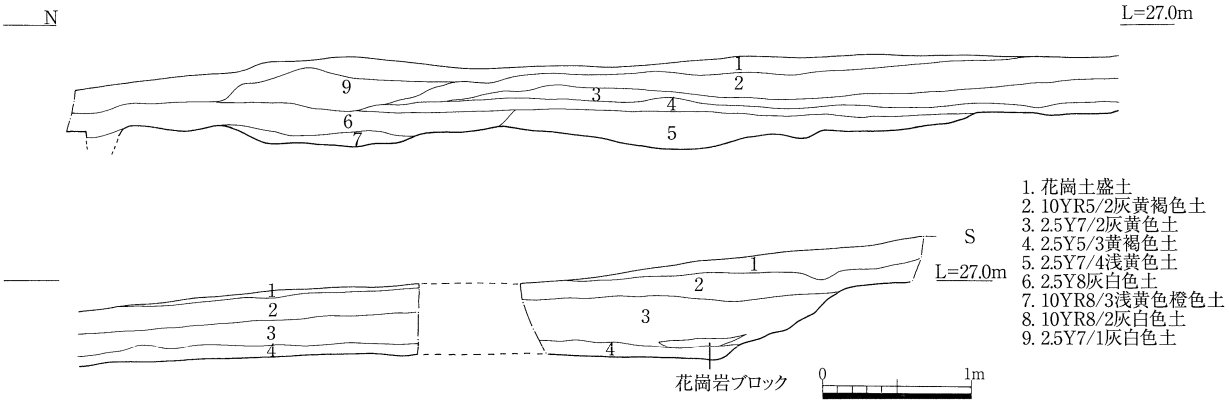
また、試掘調査では頂部から東側小枝尾根についても確認調査を行い、頂部及び斜面についても別に述べるように埋葬遺構を検出したものである。

第２節　墳丘

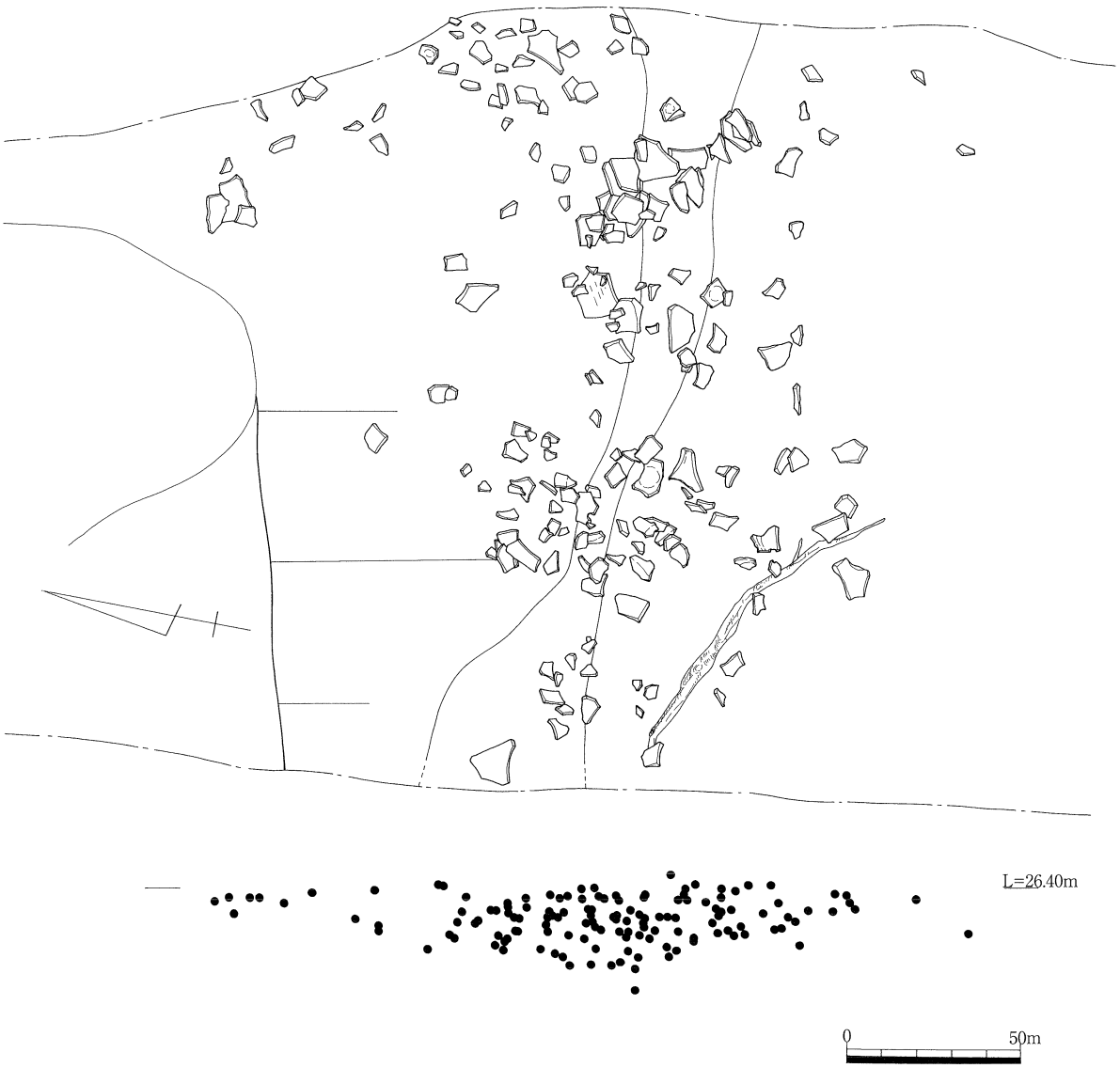
神越５号墳は調査の結果からして横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。前述したように旧地形図との合成復元では、西側斜面に立地することになるものである。調査開始時に現況による西側斜面の地形測量を25㎝コンターで行ったが、範囲が狭いこともあり明確な地形変化を認めることは困難で、コンターラインは円弧状などの有意な形状を呈するものではない。墳丘についても削平によって大きく損失しており、試掘調査の段階から視覚的な把握は不可能な状況であった。北側においては平坦地の外沿にそってコンターラインはほぼ直線的に延びている。僅かながら認められる変化は南側にかけてにおいてで、現地表面から約－１ｍまでにおいて両側が突出し、中ほどがやや窪んだラインが看取される。このうち－25～50㎝ラインが斜面を回り込むように延びている。ちょうどこの窪んだ範囲内が横穴式石室主軸方向とおおむね合致はしており、調査区内にて検出した墓道を延長すると、ややずれはあるがこの範囲内を通ることになる。墓道床面の高さで延長すると調査区から約3.3ｍのあたりで、地表面に達するものといえ若干の傾斜を考慮しても墓道入口に該当するものとおもわれる。



第４図　調査区地形測量図



第５図　調査区南側土層図



第６図　周溝状遺構遺物出土状況

次に平坦地南側を主とする土層（第５図）をみると、調査区南端では小枝尾根傾斜地の一部が段地として残っている。これより北側に向かって約６ｍ間は花崗土基盤土まで削平が及び、標高26.4ｍ前後にて水平面を形成している。基盤土直上には旧地表土とおもわれる暗色土（第４層）をみることができさらに基盤土由来のバイラン土が水平堆積を示して堆積している。これらの堆積土はこれより北にかけても広がりをみせるが、横穴式石室墓坑際の約２ｍは現表土下からの掘込みがみられ擾乱されている。このような状況のため墳丘を構成していた盛土については指摘することができない。

他方、地形改変の影響をまぬがれた神越５号墳に伴う遺構は、第４層の直下にて検出された。これは南側段地の約5.5ｍ北にて基盤土を掘り込み、調査区の東西に延びていることから周溝状遺構としたものである。調査区の関係上、東西の延長については確認できないが、南北については調査区西端で幅約３ｍを測る。深さは検出面から最大で20㎝を残すだけで、西端と東端では15㎝ほど東側が深くなっており、西端では標高26.22ｍを測る。残された掘方はほぼ水平ともいえるような、緩やかな傾斜をもつもので全体がほぼ底面といえるものである。南側立ち上がりについては旧地形を考慮しても、角度や形状について想定するのは困難である。石室北側については充分な確認が行えなかったが、崖面にて観察するかぎり同様の掘込みは看取されなかった。古墳の立地が西側傾斜地とするならば、古墳南側から東側にかけての高所のみを弧状に近い形状で掘り込んだものであろうか。

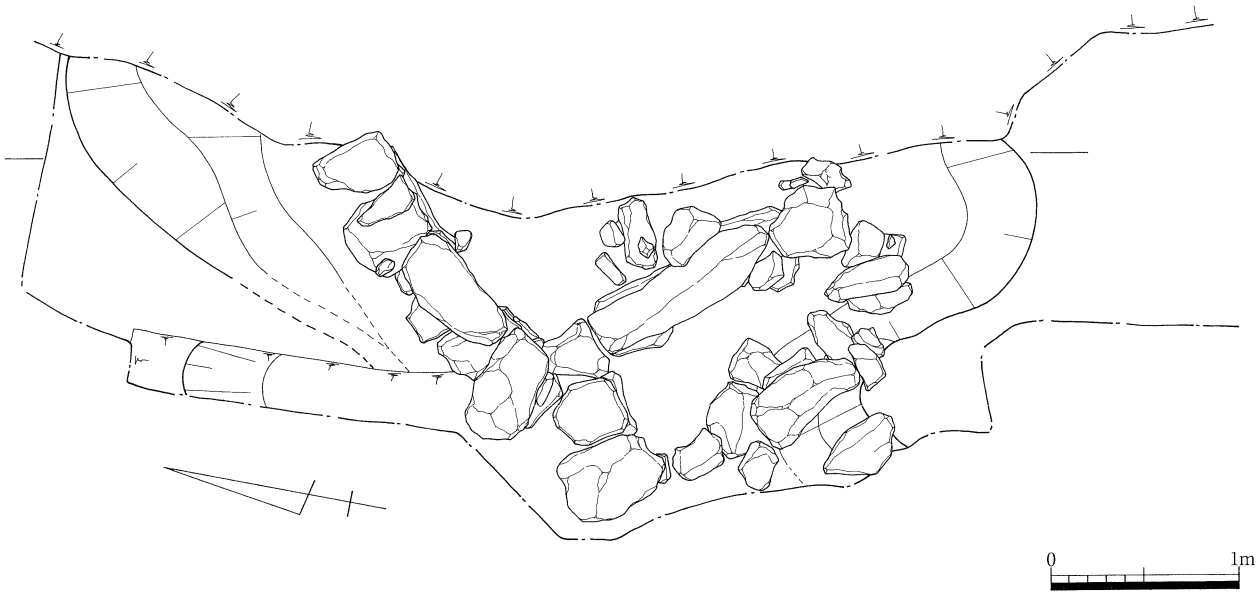
周溝状遺構埋土は浅黄色土バイラン土で、この中からは多量の須恵器が出土した。須恵器は完形に近い状態のものはなく、すべて破片となって周溝底に重積しているものであった。なお、周溝の北側には隣接して、これを切るように掘り込まれた不定形状の土坑が所在している。南北幅は約２ｍを測り、西側調査区外に延びているものとおもわれる。東壁土層で充分な層位関係を把握できず、確実に後世の攪乱かどうかの判断ができなかった。土層において周溝埋土を切り込む第６層がみられるが、この不定形土坑の埋土である第７層に掘方が連続するかどうかは不明である。

墳丘に関しては東壁土層においても盛土とされる土層は看取されず、削平によって消失したものと改めて判断されるものである。周溝状遺構については少なくとも復元想定される天端での規模は相当なものといえる。墳丘の規模については南側で検出された周溝状遺構の底面を墳丘裾部と想定するならば、半径約４～５ｍの墳丘規模に復元される。この規模で周溝底を西側に延長したとすれば、斜面南側突出の裾部ラインにおおむね整合するものである。形状については確定しづらいが墳裾推定ラインは僅かながらも弧状に巡ることから、円墳である可能性が高いものとおもわれる。

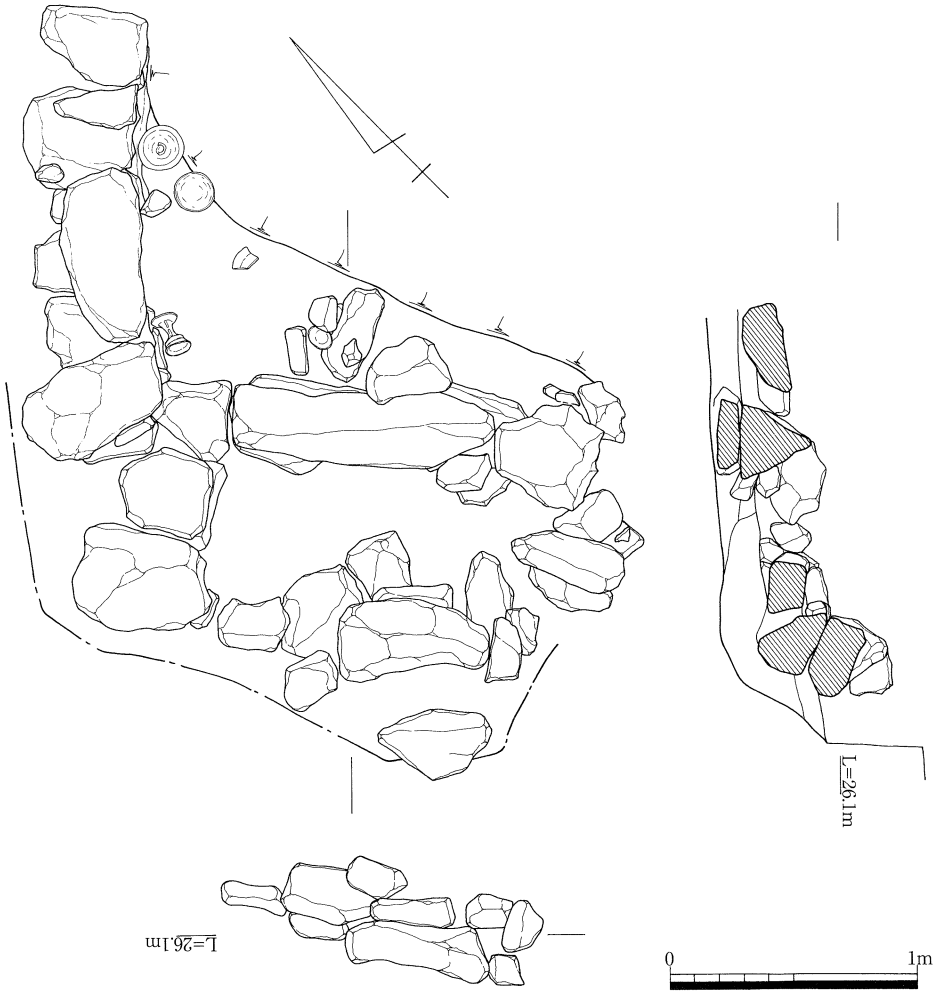
第３節　埋葬施設

５号墳の埋葬主体は横穴式石室で、石室主軸をＮ－49°－Ｗと尾根稜線におおむね斜行するようにとり南西側に開口する。石室はこれまでの削平などによって改変され、すでに天井石は残されていなかった。地表面10～30㎝下の浅い部分から石室石材が並んで確認された。発掘調査段階では比較的残存するのは右側壁（北側側壁）のみで、露出した石材から奥壁にかけては崩落し、全体的に状況は良くない。左側壁も玄室・羨道を含め使用された石材の一部を残すが、抜き取りなどの残骸で側壁を為しているものではないとおもわれる。右側壁については羨道からおおむね玄室半ばにかけて残すのみで、基底石から高さ80㎝ほどの３段分を残すのみである。

まず、横穴式石室は花崗岩基盤土を穿った墓坑内に構築したものである。墓坑は平面形でやや隅丸の長方形を呈するもので、玄室奥にかけては外に膨らみ加減となっている。羨道部から羨道先端部にかけては急激に幅を減じ、墓道が取り付くものである。墓坑は検出面で幅約3.5ｍ以上を測る。断面土層図は都合上測図ラインが屈曲したものであるが、それでも崩落部分では５ｍに達しようとするものと想定



第７図　埋葬施設検出状況

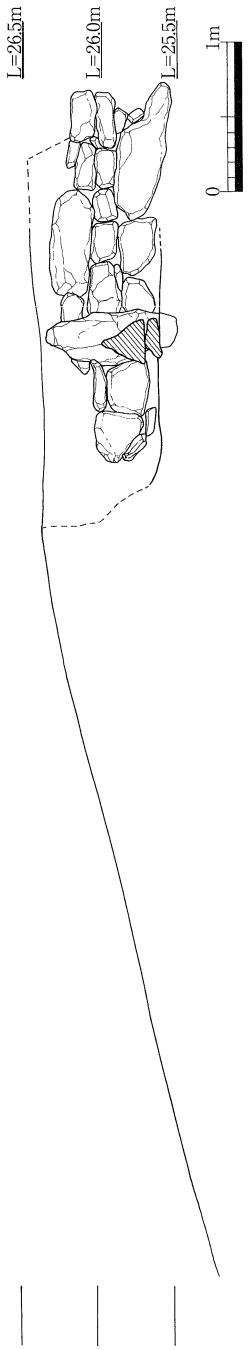


第８図　横穴式石室平・断面図

される。深さは70cmで、北側側壁下は石材据え付けのため一段掘り下げている。断面形をみると北東側では墓坑底からの立ち上がりがり緩く、上方に大きく広がりやや二段掘りになっている。これに対し南西側では後世の改変を考慮しても、その立ち上がりは直立に近いものである。検出面あたりでは段掘りとなっているが抜き取り時の改変の可能性も考えられる。

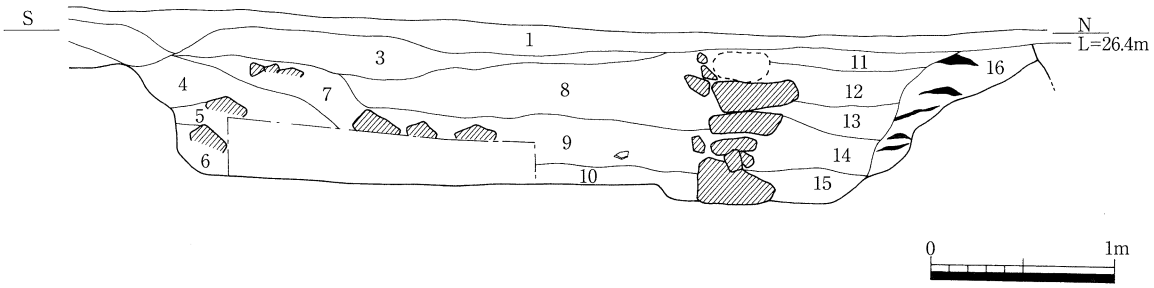
石室壁体に使用もしくはされていたとする石材は砂岩の川原石がほとんどで、わずかに花崗岩類がみられる。残る石室右側壁でみると基底石は基盤土上におおむね長さ35cm・厚さ20cmほどの、方形基調の石材を主体とし横口積に据えている。一石だけは長さ80cmをこえるものである。この上位に比較的小型の石材を積み上げ、羨道から玄室にかけて高さ40cmにて横目地がとおるようにしている。3段目では石材の大きさにばらつきがあるが、小型石材を小口積みにして混在する大型に揃えるようにしてある。袖の部分には高さ90cmを測る方柱状の石材を側壁西端の内側に並び据えて玄門立柱とし、床面で玄室側壁より30cmほど石室内に張り出す壁面を形成していた。袖部について左側壁には玄門立柱に相当するような石材はみられず、どのような積み上げ方であったかなどは不明である。ただ、墓坑掘方と仕切石南端との間は1mほどの距離があり、そのプランは右側壁とほぼ同様なものである。羨道側壁に相当する位置に散乱している石材は原位置を保持していないとおもわれる。

羨道は若干ではあるが外側に軸を曲げてはいるが、袖石とほぼ同じ並びで玄門部からつづいている。ただその長さは基底石にして2石分しかもたないものである。袖石側の石積みは玄室と同様で2段分で玄室と横目地が通るようにしてあるが、つづく1石は小口積みにして2段分の高さを確保している。また、その下には間詰石を用い安定を図っている。羨道については調査の状況からするとその上位の石材は失われているが、その平面規模については原形を留めているものとおもわれる。とくにその前面において墓坑掘方が墓道に対し急速にすぼまりをみせ、坑底も段状に高さを増していることから、築造時から現状のプランを為していたと考えるものである。このようにみると石積みによる羨道は玄室に1mにも足らないものである。



第9図　墳丘西側及び石室断面図

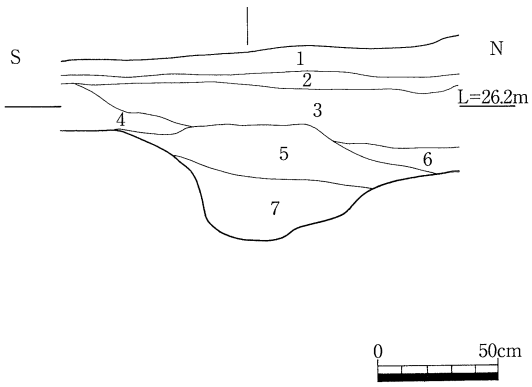
石室における本来的な側壁立断面は玄室・羨道とも多少の歪みはあるが、玄室はやや内傾しながら積み上げており、羨道はおおむね直立する形態を呈するものとおもわれる。石材の積み上げと裏込めの状



1．表土（埋め戻し土）
2．旧地表土
3．2.5Y7/2灰黄色土
4．2.5Y8/2灰白色土
5．2.5Y8/3淡黄色土
6．５層に近似土
7．４層に近似
8．10YR8/2灰白色土
9．2.5Y8/2灰白色土
10．８層に近似
11．10YR8/3浅黄色橙色土
12．2.5Y8/2灰白色土
13．10YR8/2灰白色土
14．10YR8/3浅黄色橙色土
15．2.5Y8/2灰白色土
16．15層に近似
（5Y6/2灰オリーブ色土が斑入）

第10図　横穴式石室東側法面土層図

況を北東側土層でみると、側壁後背すぐには15～20㎝前後の厚さで石材１～２段に応じて裏込め土を充填している。さらにその背後にあたる墓坑立ち上がりとの間は版築状の様子が看取されるものである。玄室床面の状況は掘削した基盤土上に灰白色土を厚さ10㎝ほど敷設し土床としていた。礫床や排水溝は確認されなかった。袖石のある玄門部には仕切石が配されていた。仕切石の構造は土床置土に石材を配置したものではなく、基盤土上に置土に相当するものとして墓坑底上に平石２枚を敷きこの上に長さ約110㎝・幅約30㎝・高さ約30㎝を測る三角柱の石材を置いたものである。

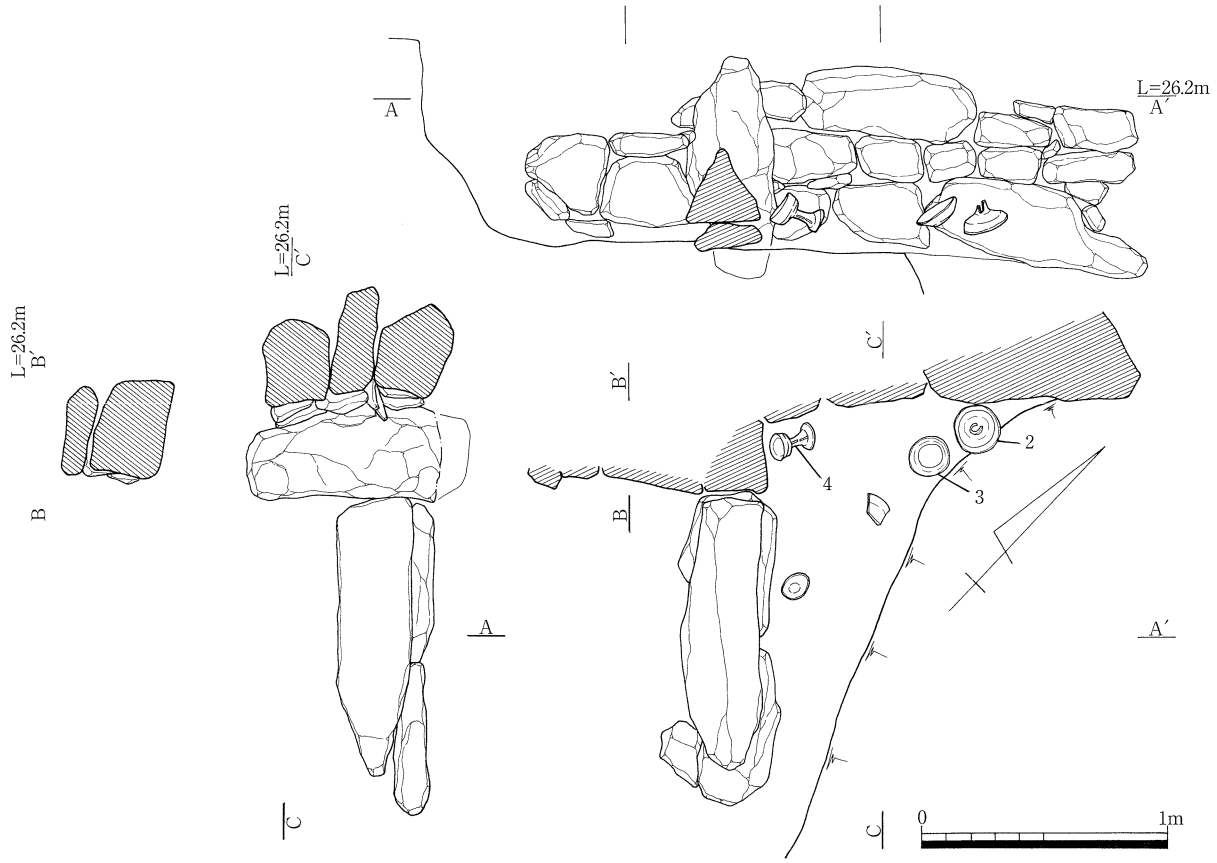


1．表土（埋め戻し土）
2．旧地表土
3．2.5Y7/2灰黄色土
4．2.5Y8/2灰白色土
5．2.5Y8/3淡黄色土
6．10YR6/3にぶい黄橙色土
7．2.5Y7/3浅黄色土

第11図　横穴式石室西側墓道土層図

墓道は調査範囲内において確認されたのは僅かな距離であるが、羨門からそのまま南西方向に延びているものとおもわれる。墓道は墓坑掘方の南西小口に連接しているもので、断面でみると基盤土を掘り窪めたもので、底面はU字状を呈するが掘方の高所南側は直立気味に立ち上がって外に開き、北側は緩く明確な立ち上がりを見せずに外開きするものである。底面では石室墓坑底と同じ標高である。また、閉塞と考えられる石塊が羨道先端において確認された。この部分ではすでに墓坑底上に土床面を形成する置土はみられず、墓坑底に30㎝ほどの層厚をもった淡黄色土上に10個ほどの石材が都合３段ほど重なっている。幅は約1.3ｍで、高さは約60㎝を測る。

残存状況が良好ではなく推定値を含むが石室の規模は、土床面での計測値で玄室長1.4ｍ以上、玄門幅約1.24ｍ、玄門での玄室幅約1.5ｍ以上を測る。羨道は長さ約1.0ｍ、羨道幅は玄門及び先端付近で1.3ｍ前後を測るものとおもわれる。玄室と羨道をあわせた全長は2.4ｍ以上を測り、残存する最大高は約0.8ｍである。平面形については右片袖式か両袖式かどうか明断できないものであるが、玄門部幅・閉塞幅からは羨道左側壁は右側壁と同様とおもわれ、玄室については墓坑の形状からその平面構造は右側壁に対応していた可能性も考慮すると両袖式であった可能性もある。



第12図　横穴式石室遺物出土状況図

第４節　遺物出土状況

古墳に伴う遺物は石室内及び周溝状遺構から出土しており、これ以外にも崩落土から回収されたものがある。石室内及び周溝状遺構からの遺物は須恵器で、崩落土からは須恵器の他に鉄器・耳環・玉類などが出土している。崩落土回収遺物はその状況から見て石室内に含まれていたものとして大過ないものである。

石室内において位置を留めていたとする須恵器は、数量的には限られるものである。その出土状況をみると確認された須恵器は玄室内にのみである。玄室内の状況は左側壁の状況を考慮するとやや攪乱が及んでいることが考慮されようが、須恵器の出土状況からするとおおむね土床面への直接的な作用は少ないものとおもわれる。須恵器は形状がわかるものは高杯のみで４点を数える。このうち３点は玄門部から右側壁際に片寄ったもので、残る小片のみが仕切石手前側で石の下にみられた。玄室内の遺物出土状況は最終的な使用状況を表しているものとおもわれるが、詳しい棺体配置や埋葬順序を窺うまでにはない。

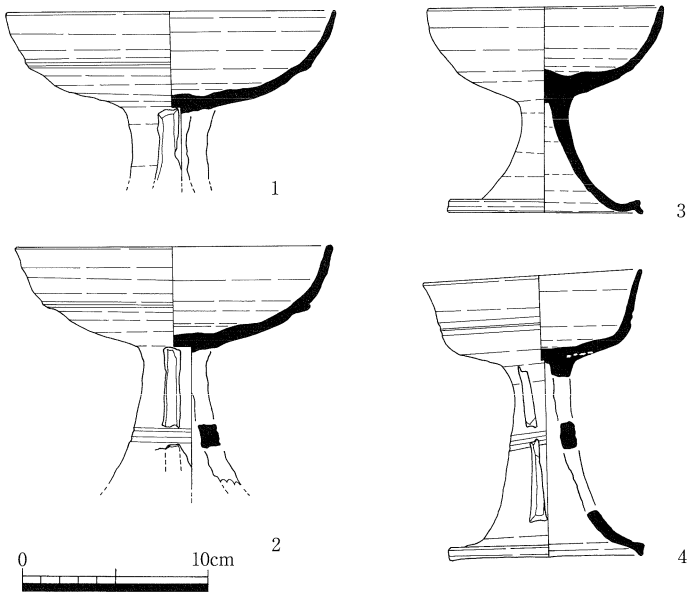
第５節　出土遺物

（１）土器

石室と周溝状遺構及び崩落土から須恵器と僅かながらの鉄製品や石製品・装飾品が出土している。量的には周溝状遺構からのものが多く、崩落土からの出土遺物は石室に伴うものとみて大過なく、時期を異にするものも含まれている。

須恵器

1～4が石室出土、5～19が周溝状遺構、20～27が崩落土からの出土である。石室内のものを含め完形品は少ない。



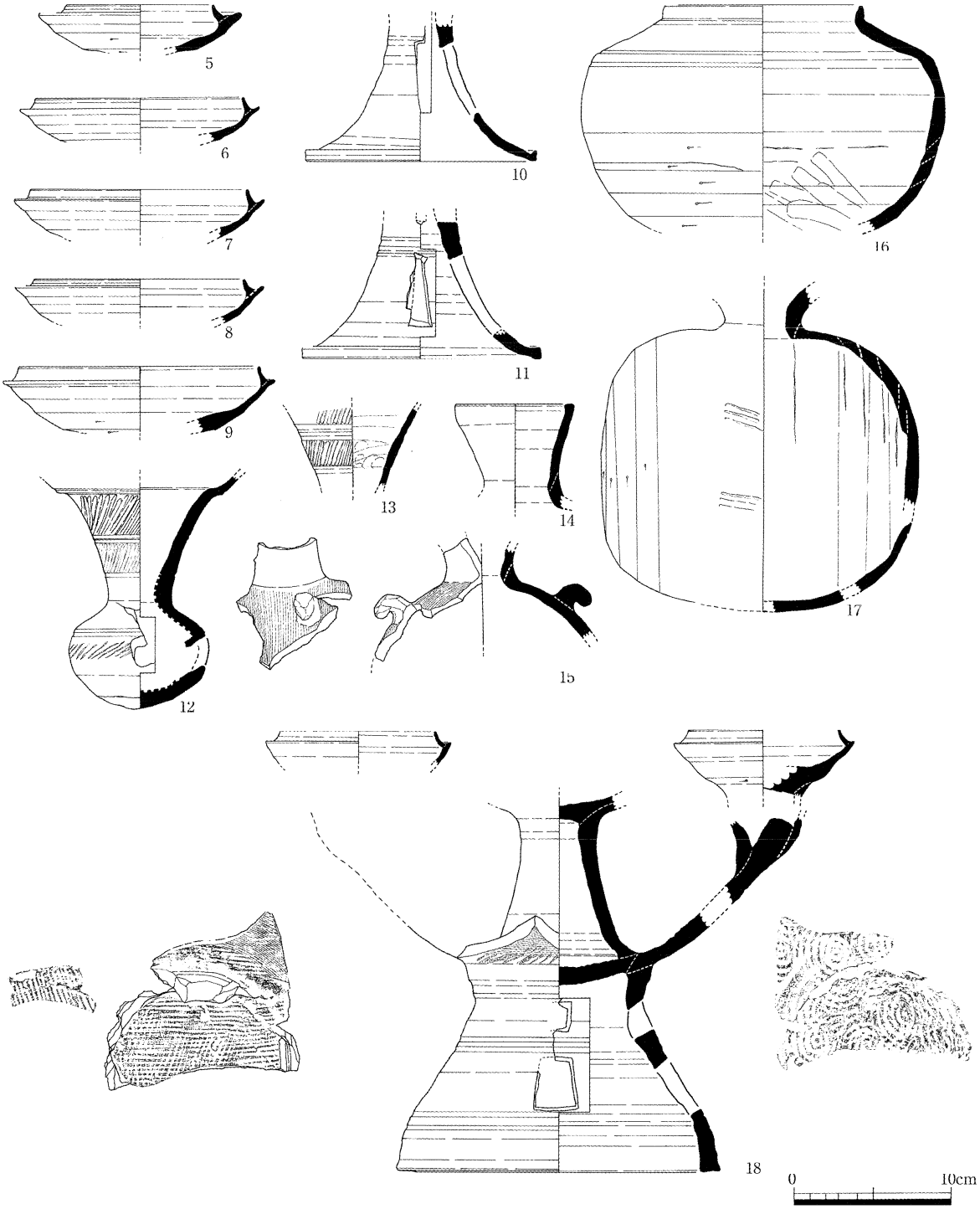
第13図　玄室出土遺物実測図

蓋杯

蓋杯は外底部の状況が確定できないものを含めて、周溝状遺構5～9と崩落土21・22の7点を数える。このうち5～9は杯身でいずれも小片である。5は口径が9㎝と小型である。受部の立ち上がりは短く内傾し、やや幅広の鈍重なものである。子持器台子杯とは受け部が異なるものである。6～8は口径が13～14㎝前後、器高がだいたい4㎝以内ほどを測りやや低平なものである。9は口径が15.5㎝・器高が5㎝近くを測るもので、6～8と比べ一回り大きいものである。口縁部は6～8の受部が杯部より直線的にのび、口縁がやや短く僅かに内傾であるのに対し、9は受部が水平方向に突き出し、にぶく収めている。また底部外面の回転ヘラケズリも半分ほどに施しており、他より丁寧といえる。21・22は杯蓋で完形および完存である。口径はともに14㎝近くで、器高は4.3～4.5㎝を測る。21の焼成は22に比べ灰白色を呈し、ややあまい感じである。21は天井部外面には反時計回りの回転ヘラケズリを施すが、やや粗雑で範囲も狭く中央は未調整である。22の天井部外面も同様で、ヘラケズリ後にナデを施している。口縁端部は丸くおさめている。

高杯

1～4・10・11・23・24が高杯とするもので、23を除き無蓋高杯である。また、20は蓋である。4のような完存品もあるが、他は部分的に大なり小なり欠損しているものである。玄室及び崩落土から出土したもののうち1・2・24は杯部が底部から口縁部にかけてやや弱い内彎気味で、途中外面に小さく段状の突出部をもち、さらに端部までは弧状を呈しながらも外上方に向かって立ち上がるものである。ただ、24は外底部が膨らまずやや直線的なこともあって、若干外形が箱状である。脚部は2をみると長方形2段透かしを正対する2方向に穿ち、中間には沈線を2条めぐらした長脚のものである。おそらく1・24も同様とおもわれる。杯部については口径では1が17.7㎝を測るが2・24は16.9㎝と僅かに小さく、深さはいずれも4.6㎝前後である。突出部はいずれも口縁から深さ3㎝の所にあたり回転ナデと沈線によって造り出されているが、鋭い稜をもつものではなく不整形でにぶい三角形状を呈するものである。ただ、24は回転ナデが強いこともあって他のよりも、突出が大きいものである。調整では3点とも外底面にはヘラケズリが丁寧に施され、内外面とも強い回転ナデが見てとれる。口縁部はいずれもにぶく丸く収めるが、2についてはやや器厚に厚みがある。3は杯部が全体的に丸みを帯びた椀状を呈し深さがあるもので、口径は約12.5㎝・器高は約11㎝・底径は約10.3㎝を測る。脚部は短く緩やかに外開きとなり、裾部で上方に屈曲し端部は下方に引き出した面をなでくぼめている。4は長脚のものである。杯部



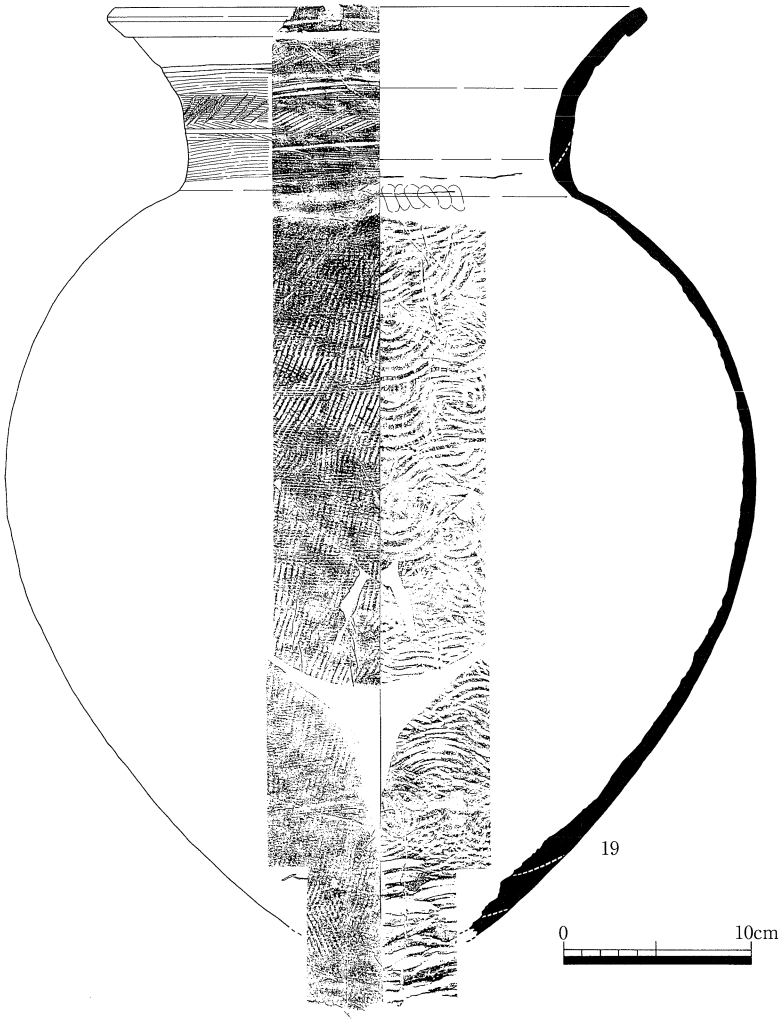
第14図　周溝状遺構出土遺物実測図①

は平らな底部から強く屈曲し、そのまま直上方に向け僅かに外反しながら立ち上がる。屈曲部には２条の沈線をめぐらしている。外底部いっぱいにヘラケズリを丁寧に施している。

崩落土からの23は有蓋高杯杯部で、脚部を欠く。口径約14.1cm・深さ約４cmを測り、外底部はやや丸みをもったもので、中ほどから受部にかけてはやや直線的である。受部は短く、口縁はく字状に短く内傾している。外底部の半分ほどに時計回りのヘラケズリを施している。20は蓋で口径13.4cm・器高4.5cmを測る杯蓋に、低平で中央をくぼましたつまみを付加したものである。色調はやや白がつよく、セット

となる高杯は不詳である。天井部はやや膨らみ加減で、緩い弧状でもって丸く収めた端部にいたる。外面にはヘラケズリを反時計回りに施している。

10・11は周溝状遺構からの出土で、図化できたのは脚部のみである。脚裾部が緩やかに広がるもので、底径は約14.3～14.8cmを測る。ただ、10は薄く裾部が長いのに対し11はやや厚みがあり裾部は短い。端部も10は上方に摘み上げ断面三角形を呈するが、11はにぶく肥厚させ断面方形を呈する。また透かしも10は長方形2段で3方向に穿ったとおもわれる。11は長方形2段でおそらく4方向に穿ったとおもわれる。また、上下透かしの間にはややにぶい感じの沈線を2条めぐらしている。



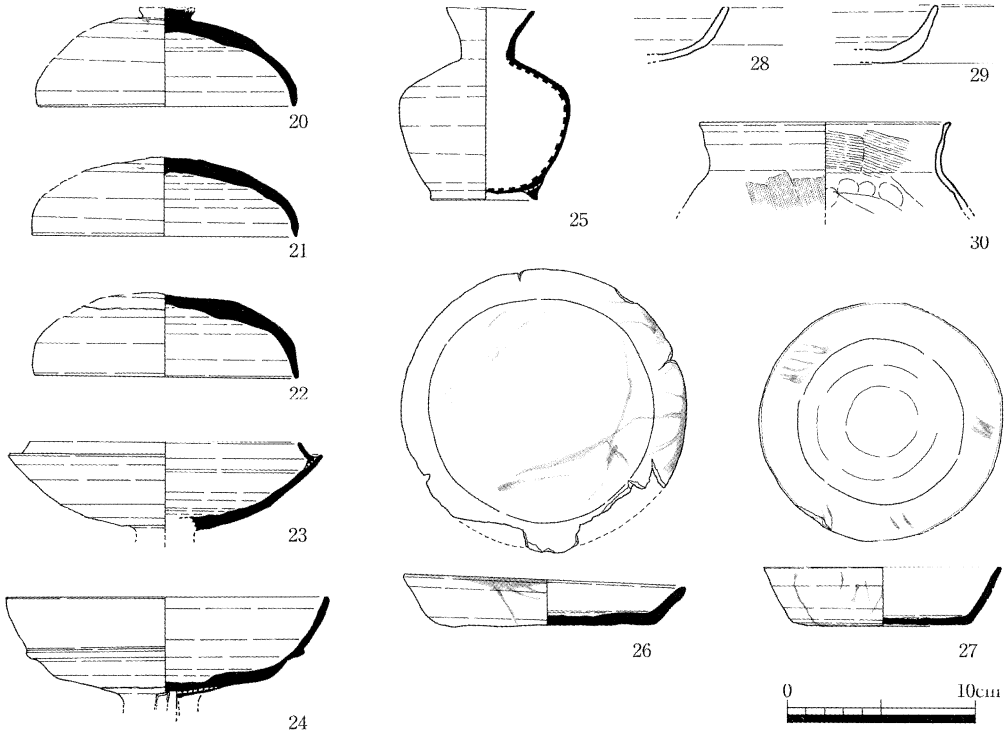
第15図　周溝状遺構出土遺物実測図②

䃺

周溝状遺構から12・13が出土している。12は口縁端部を欠くがおおむね全形が判じるものである。器高は14cm以上で胴部径は9cmを測る。胴部最大径が中ほどにあり、やや扁平で底部は丸底気味であるが直立に突き出た感をもった、やや不安定なものである。また、外底面は焼成時の仕様なのか還元しておらず灰白色を呈する。肩部外面沈には沈線を1条めぐらしており、底部への変化点には明確な沈線はないが僅かな段と成っている。この間には左下がりの刺突文を施し、外径約1.5cmの円孔を穿っている。頸部はすぼまった根本からハ字状に弧状に外反している。外面中ほどには上に2条の沈線を、下に1条の沈線をめぐらし3区画をつくり、口縁部下から2区画にハケ状工具により左下がりの浅い沈線文を連ねている。13は頸部の破片で、上2区画の施文部分である。施文は12と同じであるが、区画としての沈線がにぶくなっている。

壺

16は周溝状遺構出土の短頸壺である。口径約12.5cm・器高は14cm以上を測る。胴部は最大径がやや上部にあり少し胴張りの外形を呈している。肩部には2条の沈線文をめぐらし手いる。底部外面から胴部



第16図　崩落土出土遺物実測図

下半には反時計回りのヘラケズリを施している。内面は強いナデが顕著である。口頸部は短く直立するもので、端部はやや先細り丸く収めている。

25は崩落土から回収したもので、高台付きの小型壺である。口径4.4cm・底径5.3cm・器高10.2cm・胴部径9.1cmを測る。胴部は最大径である肩部が上位にあり、やや張りがみられる。底部にかけてのすぼまりはさほど強くなく、外底面の高台はやや斜め下方に突き出た断面三角形を呈している。外底面から胴部下半にかけてはヘラケズリ痕がみられる。口頸部は胴部から短く直上に立ち上がり、は字状に小さく直線的に外開きとなる。端部は先細り気味に丸く収めたものである。

提瓶

14・15とも周溝状遺構からの出土である。14は口縁部の破片で、重厚である。やや歪みがあり直線的に斜め上方に立ち上がっている。端部は内側に摘み出し、上面は平坦である。15は胴部上半から頸部にかけての破片である。胴部正面外面にはカキ目があり、把手は鉤形である。頸部は中ほどまで直立している。

横瓶

17は提瓶と同じく周溝状遺構から出土したもので、口縁端部と胴部の一部を欠く。器高は20cm以上で、胴部最大径20.5cmを測る。胴部外側面には反時計回りのヘラケズリが施され、ほかは全体的に内面ともナデ調整である。また、もう片方の側面には成形時の開口部を塞いだ粘土板接合痕が明瞭である。口頸部は短く直立してすぐ斜めに折れ広がるものである。

装飾器台

周溝状遺構から細片となって出土したもので、高杯形器台の中央に高杯を配し、口縁周りに杯身を付属させたいわゆる子持器台である。比較的親器である器台の脚部は復元されたが、杯部は子器を含め欠損が多いものである。親器である器台脚部は高さ11.7cm・底径19.5cmを測り短脚とされる。脚部は杯部接合部からハ字状に開き裾部では内側に向け折れ、そのまま端部にいたる。端部はナデによってややへこむが平坦にこしらえている。脚柱部は中ほどやや上側に2条のナデによる沈線をめぐらし、これを挟んで上下に長方形の透かしを2段直列で穿っている。透かしは4方向に開けられているが等間隔ではなく、3ヶ所が間隔を詰めたものとなっている。また、内外面ともナデ調が顕著である。杯部の詳細は不明であるがその形状は弧状を描いて内彎する深鉢に復元される。外底面には平行タタキが密で、脚部との接合下にも鮮明である。これより上位にはカキメが施されている。中ほどの状況はわからないが、破片の一部にナデが見てとれる。内面については底部では同心円文の当具痕がみられる。また口縁端部は内面に弱い段をもって断面方形状に肥厚させている。

子器については高杯を中心に据え、周りに杯身を配置している。杯身は4個体分出土しているが、5個体を数えるものと推定される。高杯は上半を欠くが、脚部には長方形透かしが2方向にみられる。杯身は口径9.5cm前後・深さ2.3cm前後のもので受部は小さく口縁はく字状に内傾している。

甕

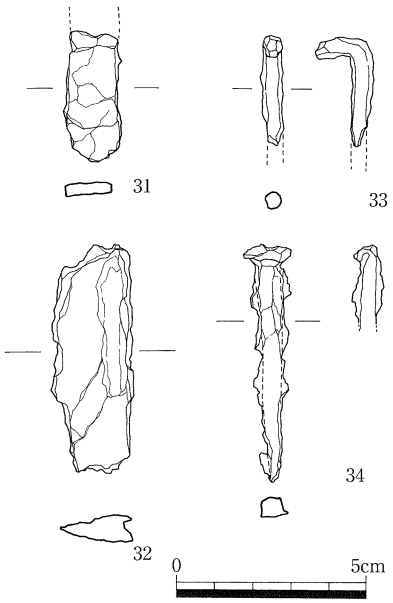
19は大甕で、周溝状遺構からの出土である。口径は約28cmで器高は50cm前後である。体部は細長い感じの倒卵形を呈し、底部にかけては強くすぼまる。底部の形状は不明である。口頸部は体部との境から直立したあと、ハ字状に折れ広がる。体部の外面にはタタキとカキメが、内面には同心円文がみられる。口頸部の外面には2条のナデによる沈線がめぐらされ、全体的にカキメが施されている。また沈線の間と一段上の2列には櫛状工具の先端による左下がりの刺突文が施されている。ただ、上段の刺突文は乱れている。口縁端部はその先端を1cm弱ほど折り返し、断面低平な方形状に肥厚させている。

皿・杯

26・27は崩落土からの皿と杯である。26は皿で、口径15cm・底径11.3cm・器高2.4cmを測る。外底面の調整は不鮮明である。また、外底面から口縁外面にかけて火襷がみられる。口縁部はやや厚みがあり端部はにぶく丸く収める。27は杯で口径12.7cm・底径9.3cm・器高3.2cmを測る。外底面にはヘラ切り痕が残る。口縁部は斜め外方に直線的に延び、端部は補足収めている。また、内外面に火襷がみられる。

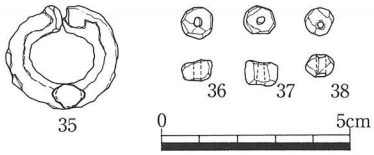
土師器

28～30は崩落土から出土した土師器でいずれも小片で口径は不明である。28・29は皿で、29はやや厚みある。内外面ともナデがみられ、口縁端部は丸く収めている。30は甕である。胴部外面には細かい縦方向のハケメが密にみられ、内面にはヘラケズリが稜線直下ま



第17図　鉄製品実測図

で及ぶ。口頸部はやや直上気味の斜め外方に立ち上がるが、口縁端部はナデにより平坦面をもたせており、外方へも引き出すことにより肥厚させている。内面には斜めハケメが顕著である。



第18図　装身具実測図

(2) 鉄器

鉄器は4点が出土しており、32が崩落土からのもので他は石室南側の掘削時のものである。遺構からの出土とするものではなく、帰属時期の比定が困難である。

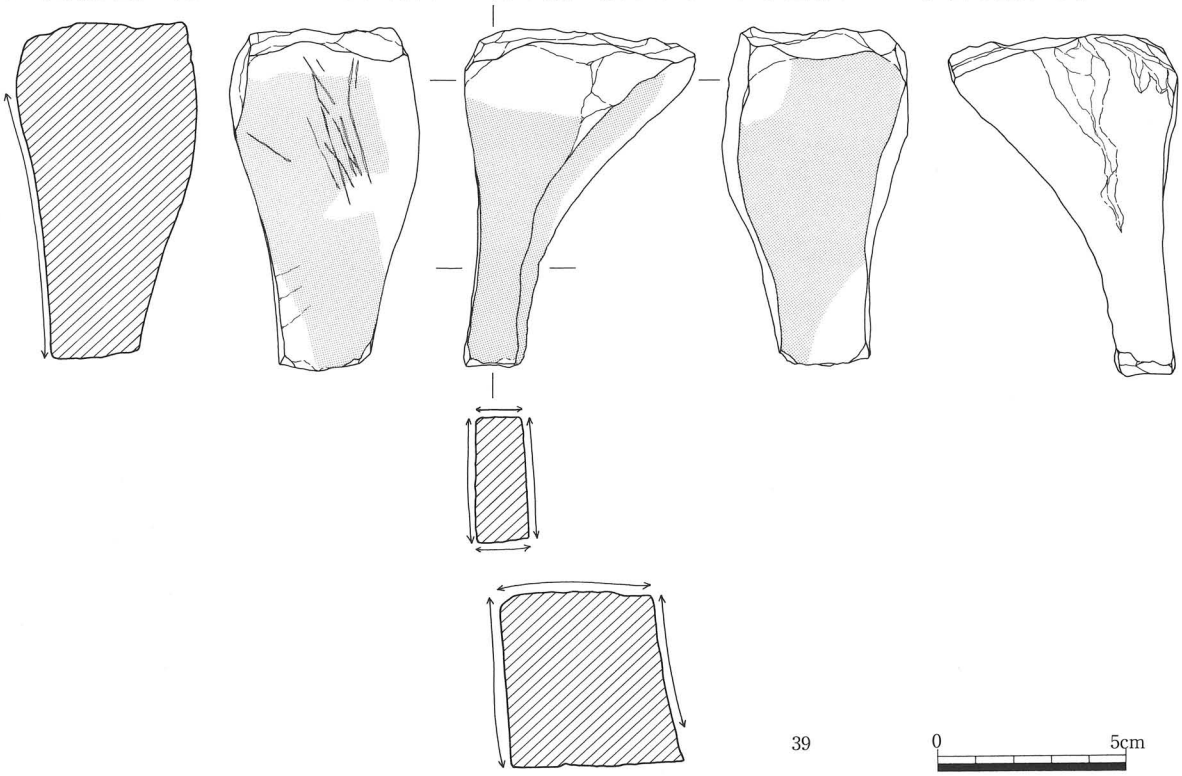
31は長方形の破片で、刀子などの茎基部であろうか。現存長約3.5cm・幅1.5cm・厚さ0.3cmを測り、下端は三角形状を呈している。32は刃部および茎部の一部を残した刀子である。現存長は約6cm、刀身部は長さ5.1cm・幅約2cm・厚さ0.7cmである。33・34は鉄釘とするものである。

(3) 装身具

装身具は崩落土より回収した耳環と土製練玉が僅かにみられるのみである。耳環は35の1点のみで中実品である。外径が2.7～2.9cm・断面径約0.8cmを測る。断面形はやや扁平な円形を呈している。全体に緑青がふいているが表面には銀を確認することができる。土製練玉は3点あり、直径0.8cm前後のもので黒褐色を呈する。

(4) 石製品

崩落土からは砥石が1点出土している。長さ約9cm・最大幅約6cm・厚さ4.7cmを測る。天地左右4面に使用痕跡を見ることができ、側面の一方が強い弧をなしており全体にはL字状を呈する。

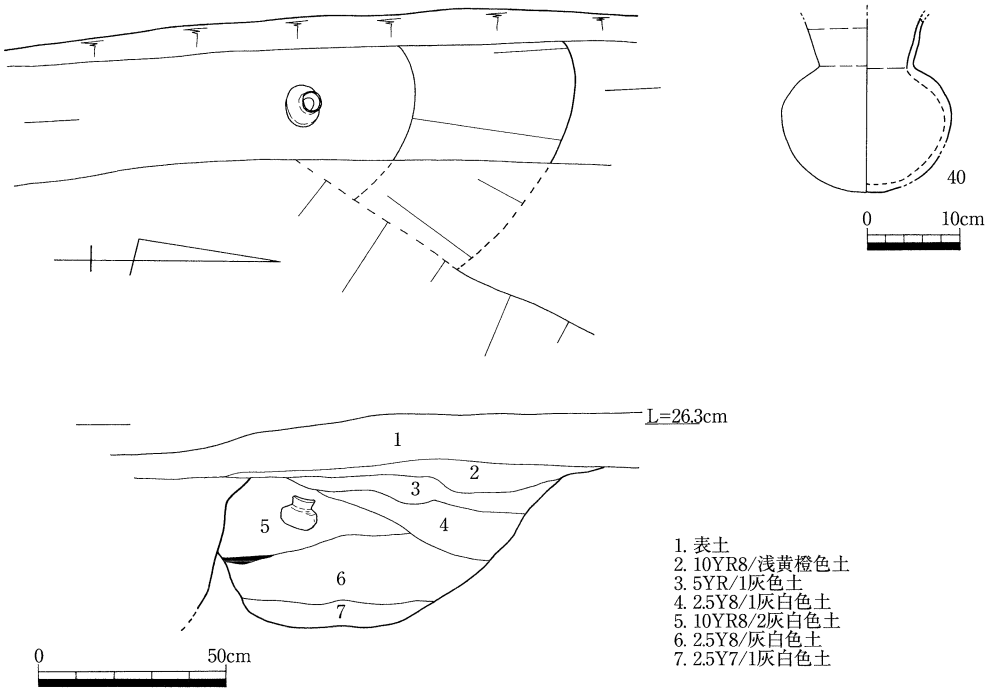


第19図　砥石実測図

第６節　その他の遺構

今回の調査では横穴式石室北側において、横穴式石室墓坑によって切られるかたちの土坑を１基検出している。土坑はちょうど調査区北側の横穴式石室墓坑西北隅に位置するものである。土坑については掘削を調査区内にとどめたもので、南側を墓坑できられていることと合わせ全形については不詳である。ただ、検出した範囲では北側掘方が弧状を呈していることから、楕円形状のものと推測される。調査区壁面土層でみると土坑は削平された基盤土上面から掘り込まれており、いる。検出面での南北軸での残存長は約0.9mで、深さは0.4mを測る。底面はおおむね平坦で、掘方は北側が底面から緩やかに斜め上方に立ち上がるが、南側はやや角度がきついものである。埋土は基盤土由来の灰白色バイラン質土である。遺物は土師器の小型丸底直口壺が１点出土している。層位的には底面ではなく上層からの出土で、口縁を上方に向けた状態であった。

直口壺は口縁端部を欠くがほぼ完形である。体部は最大径が中位よりかはやや上にあり、多少ではあるが張る感じで、全体にはやや扁球状を呈している。底部は丸底である。頸部の直径は約5.1cmで胴部最大径の半分以上である。口頸部はやや直立気味の斜め外上方に開くもので、端部はさらにナデにより外に広げるものである。時期についてはおおむね古墳時代前期後半に位置付けられるものとおもわれる。



第20図　その他の遺構平・断面図及び出土遺物実測図

第４章　　まとめ

今回の発掘調査は崩落後の着手となったため、結果としていろいろな制約下での調査となった。このため得られた結果は限られたものとなってはいるが、ここではこれら判明した内容から本古墳についてその成果を簡単にまとめることとする。

第１節　古墳の時期について

今回の調査において神越５号墳からは一部に出土状況の不明な一群が含まれるが、玄室や周溝状遺構からはある程度のまとまりを示す須恵器が出土している。これら須恵器には古墳築造時期とこれにつづく追葬時期などを示すもののほか、目的は明らかではないが後世のものが含まれている。ここでは古墳築造時期及びその継続的な追葬時期について検討していくものとする。対象には蓋杯とあわせ量的な出土をみた高杯を加える。

図示した蓋杯については周溝状遺構及び崩落土からの出土である。杯蓋については21・22の２点で、法量は同様なものである。口径が約14㎝、器高は4.4㎝前後を測り、ともに短く直立する口縁部から低平な天井部をもつものである。杯身は図示したものはすべて破片で法量は復元となるが、おおむね口径が13～14㎝、器高が４㎝前後を測るものが主体である。これらより法量が大きくまた小さい個体もあるが、別器種の可能性も考慮され杯蓋と杯身ともそれぞれ一型式のみとおもわれる。ただ、その出土位置は杯蓋が崩落土と杯身は周溝状遺構からと違いがあり、セット関係などについては指摘できない。

高杯については周溝状遺構・崩落土のほか玄室からも出土しているが、杯部の残る６個体のうち無蓋高杯が５個体をしめる。無蓋高杯５個体のうち３個体は１・２・24のような杯底部から口縁部にかけて内彎気味の弧状でたちあがり、外面に段状の突出をもつものである。これらは法量もほぼ同様で、脚部も同列長方形２段透かしとおもわれる。ほか２点は３が短脚で杯部もやや椀状を呈し手いる。４の脚部は前記３点と同じであるが、杯部は口径に比して深さがあり外形も箱形を呈するもので、このように無蓋高杯はＡ類（１・２・24）・Ｂ類（４）・Ｃ類（３）にそれぞれ分類される。他方、有蓋高杯が崩落土より出土しており、セットかどうかは不明であるが同じく蓋が出土している。高杯杯部は口径・器高とも周溝状遺構出土杯身より一回りほど大きいものである。

上記の蓋杯や高杯からみる時期比定については無蓋高杯のうちＡ類・Ｂ類は長脚品であるが、その高さは約12㎝となっており縮小化が窺われ、透かしも長方形を２段２方向に穿つものである。また、Ｂ類は杯部が無文化していることなどをあわせると、陶邑須恵器田辺編年に拠るところのＴＫ43型式～ＴＫ209型式に相当するものとおもわれる[1]。さらに、これらの中でも透かしなどの設定の仕方はやや新しい様相のものと想定される。他方無蓋高杯Ｃ類はこれらより後出するものでＴＫ217型式相当とおもわれる。蓋杯については同じくＴＫ43型式～ＴＫ209型式に相当するものとおもわれる。個別的には古い様相をとどめつつも、全体としてはおおむねＴＫ209型式に含まれるものとおもわれる。これからすると出土須恵器の年代は、おおよそ２型式相当の７世紀初め頃から半ばにかけてのものとおもわれる。一方で、崩落土内からはやや時期を異にする土器の一群が出土している。25～30は小壺や杯・皿などの須恵器や甕や皿の土師器を含むもので、９世紀初めにかけてのものとおもわれる。

以上のような７世紀前半代と９世紀初め頃の時期を隔てた須恵器の出土がみられるのであるが、基本的にこれは古墳における築造とこれにともなうその継続的埋葬行為が途絶した後、何らかのかたちで為された古墳または石室の再利用を示すものと考えられる。ただ両者の歴史的つながりについて、関連性

ありと判断するにえないものである。したがって個別的に古墳の築造時期とその継続的埋葬行為がおこなわれた時期は、７世紀前半代に帰するものである。さらに須恵器などの出土状況などから、埋葬行為の段階差がうかがえるかどうかである。玄室内では右側壁下にＴＫ209型式に比定される無蓋高杯がみられ、玄門よりにＴＫ217型式期相当の無蓋高杯が破片となって礫下にある。周溝状遺構では細片となって底面のほぼ直上にみられ、埋没前の葬送儀礼に伴った行為の結果としてみることが出来よう。おおむねＴＫ209型式に比定されるものとおもわれる。出土状況からみてやや不明確なところを残してはいるが、須恵器の年代観のとおり７世紀前半代における時間幅の中での複数回の執行が想定される。神越５号墳は７世紀初めの築造で、周溝状遺構や玄室内の一群が初葬に伴い、他７世紀半ば頃のものが追葬されたものと想定しておく。

第２節　装飾付須恵器について

今回の調査では周溝状遺構より高杯形器台の親器に子杯を取り付けた、いわゆる子持器台が出土している。県内ではこれまでのところ出土例も少ないこともあって、検討の対象とはなっていないのが現状といえる。近年では近畿を中心にその集成や分類がおこなわれ、その意義付けについて言及されている。ここでは県内における新たに判明した出土例を加え今後の端緒としたい。

出土例

山田邦和氏による分類での装飾付須恵器の集成では10遺跡から11点の資料が把握されている[(2)]。これには装飾付須恵器のうち子持器台４点と装飾付壺５点のほかに、子持蓋１点と配像高杯型器台１点が含まれている。この他に安造田東３号墳からは複合須恵器とする脚付三連壺が出土している。また、善通寺市王墓山古墳ではこれまでの遺物のなかに、配像高杯型器台が出土していることが指摘されている。このように既知の出土例については若干の不明もあろうが、おおむね15点にも満たないものといえる。これらの出土した古墳の分布を見てみると旧飯山町・善通寺市あたりを中心とした中讃地域に偏在しており、さらに観音寺市域に分布を見るものである。これに対して高松以東については空白となっている。今回の東讃地域を中心に出土例の確認をおこなったところ、神越５号墳以外にも下記の４遺跡において装飾付須恵器の出土を確認した。

極楽寺東古墳（さぬき市東）[(3)]

現状では周囲を含め改変された把握しにくいが、長尾平野中心部に南から舌状に張りだした低丘陵上に立地する古墳である。低丘陵は現極楽寺のあたりで二股に分かれ、極楽寺東古墳は東側小枝尾根に所在する。これまでに県道バイパス工事や土地造成工事に際し、古墳裾部付近については発掘調査が行われてはいるが、墳丘及び埋葬施設自体については詳細不明である。これまでの結果によると極楽寺東古墳は周溝を巡らした墳丘直径20mをこえる円墳に復元される。周溝からは多量の須恵器が出土している他に馬具の出土をみており、時期的にはおおむね６世紀後半頃とおもわれる。周辺には数多くの横穴式石室墳の他、箱式石棺墓や土坑墓が発見されており、６世紀前半から古墳群の形成が始まる。なかには東讃では導入期の横穴式石室墳もあり、その変遷や階層的に構成された古墳群は重要な資料といえる。極楽寺東古墳はその規模や遺物などからみて、当古墳群での盟主的古墳に措定されるものである。

極楽寺東古墳にて出土した装飾須恵器は装飾付壺の口縁部と子壺で、平成４年度古墳北側水路改修における試掘調査によるものである。親壺は有蓋とおもわれる。削平されてはいるが周溝に比される深さ約15cmを残す溝より子壺は出土しており、極楽寺東古墳における葬送儀礼に使用されたものとおもわれる。

八坂北山古墳（さぬき市造田是弘）[4]

旧志度町と長尾町の境をなす石鎚山から南に派生する丘陵の、標高約60mを測る頂部に所在している。平成７年度に土地造成事業に伴う発掘調査が実施され、一つの墳丘に二基の横穴式石室をもった古墳であることが確認されている。墳丘は改変や流出が激しく旧状を留めないが南側には周溝の一部が残存し、おおむね直径が15m前後の円墳に復元されている。横穴式石室は墳丘の中央付近にほぼ並置してあり、開口方向も同じく南側をとる。時期は北側の１号石室がやや先行し、６世紀後半から７世紀前半にかけてで、２号石室は７世紀初めから半ばにかけてのものとおもわれる。先行する１号石室が主体となるものである。周辺の山塊には単独または数基からなる古墳群が点在している。一墳丘二石室という特徴も、出土した遺物などからみて長尾北部の中では上位に位置付けられる古墳である。

装飾須恵器が出土したのは１号石室からである。１号石室玄室床面には礫床が敷設され部分的に２重になっている状況である。礫床上には遺物がある程度まとまりを見せながら散布しており、右袖のやや手前のまとまりから装飾須恵器の破片が出土している。出土したのは装飾付高杯型器台の口縁部片である。子器は杯身が２点とその蓋とできるものが出土しており、器台口縁端部には半円形の剥離痕が明瞭に残されている。

蓑神塚古墳（さぬき市寒川町石田東）[5]

弥生時代後期から古代にかけての拠点的集落である、森広遺跡の南側に位置する低丘陵斜面裾部に所在する。古墳は人家間際にあり、墳丘は改変され石室周りを残すのみで旧状を留めない。埋葬施設である横穴式石室は古くから奥壁が開口しており、本来の開口部は土砂で埋もれている。石室は基底石に長径1.5mをこえる石材を使用したもので、玄室長は4.45m・幅1.95mを測り、石室長は約7.5mに及ぶものである。玄門には羨道より内側に突出する立柱を、床面には仕切石を配している。また、玄室床面には小礫でもって礫床としている。開口していたこともあり遺物は僅かであるがおおむね７世紀前半頃に位置付けられており、石室の規模や使用石材などからすると中尾古墳につづく首長墓といえるものである。

装飾須恵器は玄室より装飾付高杯型器台の子器である杯身が１点出土している。

久本古墳（高松市新田町）[6]

高松平野北東部の立石山から西へ延びる丘陵先端から、平野との地形変換点にあたる台状地に立地している。古くより知られた大型の古墳で、調査の結果より直径約36mを測る墳丘に周溝・周堤が敷設されており、合わせると直径53mに復元されるものである。石室は全長10mをこえる巨大な両袖式横穴式石室で、県内で唯一石棚をもつものとして知られている。築造時期は７世紀前半で、半ばを過ぎる頃まで使用されていたとされる。遺物についても多くの須恵器や土師器・鉄製品のほかに陶棺や銅鋺が出土しており、銅鋺もまたこれ以外の出土は県内で知られていない。当該期最大級の墳丘に石室をもち、石棚や銅鋺といった稀少的な内容を有することから、大和政権下での讃岐において重要な役割を果たした氏族を代表する古墳とされる。

久本古墳からは装飾須恵器は石室開口部前面の周溝より、装飾付壺の子器である子壺が１点出土している。周溝埋土最下層にあたる青灰色粘土層からの出土で、他にも須恵器甕片などが散漫に出土している。

これらをあわせ装飾付須恵器の細分での出土状況をみると

装飾付壺：極楽寺東古墳・久本古墳・山崎古墳群・王墓山古墳（２）・三ノ池地区・母神山古墳群

子持器台：神越５号墳・北山八坂古墳・蓑神塚古墳・安造田東３号墳・喜田荒神古墳
　　母神山古墳群・久保大塚古墳

となり、配像高杯形器台[7]と子持蓋例を加えて県内では14遺跡16例となる。

今後、装飾付須恵器については出土数が増加したとしても、古墳の総数からしてやはりその割合は僅少なものといえるものであろう。ただこれまでは中讃以西に地理的分布が偏在していたが、東讃においてその使用が確認されたものである。

第3節　小結

神越5号墳は7世紀初頭に築造された、横穴式石室をもった古墳とされるものである。近年、東かがわ市内における当該期の古墳調査事例が原間池周辺において増えてはいるが、なお市内に限っても小地域ごとの様相は不明なところが多い。これまでの知見からして、石室規模から有力首長墳とされる原間1号墳・川北1号墳・藤井古墳は単独で孤立的に所在するものである(8)。一方で市内における横穴式石室墳の分布は原間池周辺のほか、帰来地区や水主別所地区にある程度の所在が想定される。ただ、群集する度合いは他地域と比した場合、大きいものとはいえないものである。いまだその構成については不明なところが多いといえる。

このような状況において今回の普遍的ではない遺物といえる、装飾付須恵器の出土は注目されるものである。当該期になって装飾付須恵器を使用した小規模古墳の著しい増加とその出土状況にも変化がみられ、葬送儀礼の質的変化に関連したものであることが窺われるものとされる(9)。神越5号墳は石室規模からいって中小に区分されるもので、上述した原間1号墳などとはやはり格差があり、下位層への使用拡大の結果ともいえる。一方さぬき市内の3例は、その地域内の（最）上位首長層の古墳に区分されるものである。たしかに装飾付須恵器の使用は限定的なもので特殊な要因が介在した側面もあろうが、その導入にあたっては地域ごとの変容があったともいえる。今回明らかになった神越5号墳での装飾付須恵器の使用は、今後東かがわ市内における古墳の位置づけを検討するうえでの重要なものといえる。

註

（1）田辺昭三『須恵器大成』(1981)
（2）山田邦和「装飾付須恵器総覧」『須恵器生産の研究』(1998)
（3）『香川県埋蔵文化財調査年報平成4年度』(1993)　香川県教育委員会
（4）『八坂墳墓群・北山八坂古墳』(1997)　長尾町教育委員会
（5）『香川県埋蔵文化財調査年報平成13年度』(2003)　香川県教育委員会
（6）『高松市指定史跡久本古墳』(2004)　高松市教育委員会
（7）『史跡有岡古墳群（王墓山古墳）保存整備事業報告書』(1992)　善通寺市教育委員会
（8）3基は旧町単位で所在しており、谷筋奥や山塊頂部に立地するものである。石室の形式分類や周囲の遺跡状況からそれぞれの位置づけは措定されるが、前後の時期をあわせ群集するものではない。
（9）山田邦和「第三章　装飾付須恵器及び特殊須恵器の研究」『須恵器生産の研究』(1998)

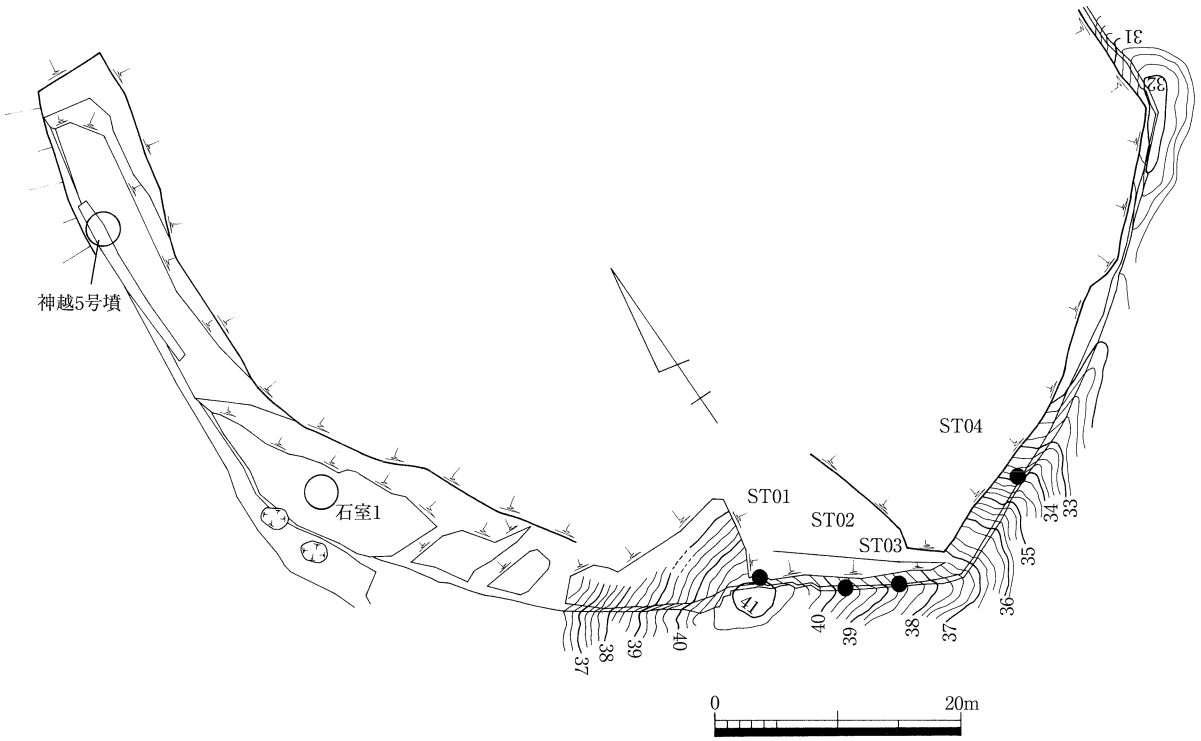
付　載　　樋端北遺跡について

ここでは平成12年度に神越５号墳とともに遺跡の所在を把握し、翌13年度に地形測量等の確認調査を実施した同一丘陵上に所在する、樋端北遺跡を含む古墳についての概要を簡便に記すこととする。

まず、神越５号墳以外に横穴式石室とおもわれる遺構が、５号墳の南側上方にて確認されている。現状では削平が著しく平坦地となっており、現地表面には石室石材が転がっている。試掘トレンチをコの字状に設定したところ、東側の地表下30?40㎝において丘陵稜線に平行する方向に数個からなる石列が確認されたものである。残存状況はさほど良くないとおもわれ、平面プランは明確にはしがたいが何らかの埋葬施設の可能性が考えられ、神越７号墳として把握したものである。遺物などは確認されていない。

次にちょうど東西小枝尾根の起点となる中央頂部において、境界から北側だけではあるが土坑状遺構の一隅が検出されている。神越４号墳としたものでその規模は南北に１.５ｍ・東西に０.９ｍを測り、さらに南側に延びているであろうことから、その規模はより大きいものであることが窺われる。

神越４号墳とする中央頂部東斜面からさらに鞍部を経て延びる東側小枝尾根稜線において、数基の土坑墓を検出するとともに土器棺とおもわれる弥生土器片を採取している。確認された土坑墓は３基で、これらをまとめて樋端北遺跡としたものである。検出したのは４号墳と同様に稜線から北側のみで、全体の規模・形状は不明である。上方から１号墓としたもので、１号墓は標高39.８ｍ前後に位置するもので、検出できたのは一隅のみである。形状は不明だが隅丸の長方形であろうか。規模・主軸方向も判然としないがやや斜行ではあるが、尾根稜線におおむね平行していることがうかがわれる。また、平石が１点検出されている。２号墓は１号墓から斜面を下って約３ｍのところに位置するもので、標高は約38.６ｍを測る。検出範囲は北半分ほどであるが、主軸は稜線と平行にとり長さ約１ｍで長方形を呈する。３号墓は２号墓からさらにこの斜面を下り、標高37ｍで尾根筋が北東に方向を変えてから８ｍほどのところに位置する。標高は約34ｍで検出した状況からして、尾根稜線に直交するもので、片方の小口部分のみを確認したものである。長さは不明だが、幅は約１ｍを測る。検出面での掘方の比高差は15㎝ほどあり、検出精査時に平石が２石ほど検出され小口方向に直列している。



第21図　樋端北遺跡地形測量図

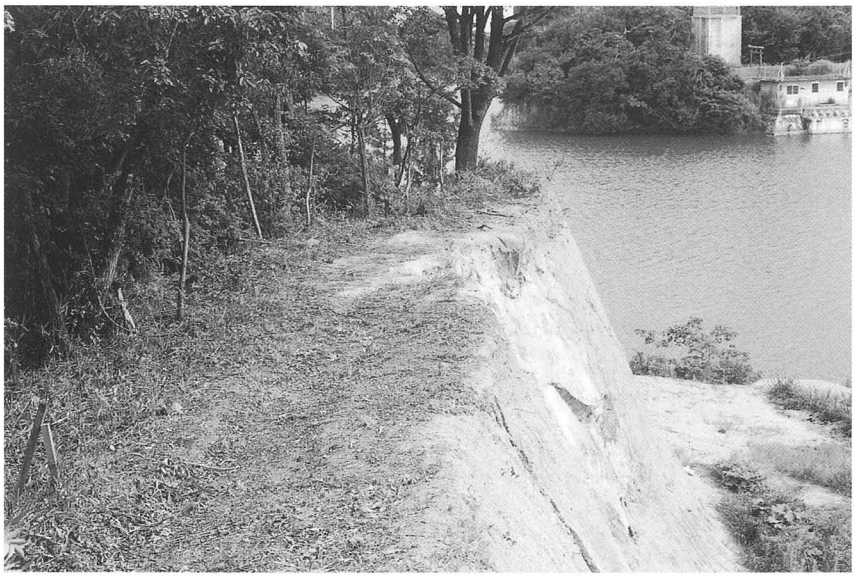
出土遺物観察表

掲載番号	種別	器種	法量（cm）			残存状況	色調	焼成	胎土	特徴
			口径	器高	底径					
1	須恵器	高杯	17.6	－	－	脚部が少し 杯部は完形	黄灰色(2.5Y6/1)	良好	精良	
2	須恵器	高杯	17.0	－	－	杯部完形 脚部1/2		良好	精良	
3	須恵器	高杯	12.6	10.9	10.4	全体の2/3	灰色(N5/)	良好	1mm以下の砂粒多	
4	須恵器	高杯	11.7	14.9	10.3	ほぼ完形	灰色(5Y6/1)	良好	3mm以下の砂粒	
5	須恵器	杯身	9.2	－	－	口径の1/6	内）灰白色(2.5Y7/1) 外）浅黄色(2.5Y7/3) 受部）褐灰色(7.5YR5/1)	やや不良	1mm以下の砂粒多	
6	須恵器	杯身	13.2	－	－	口径の1/6	灰色(N5/)	良好	精良	
7	須恵器	杯身	13.8	－	－	口径の1/4	灰色(N6/)	良好	精良	
8	須恵器	杯身	13.4	－	－	口径の1/5	灰色(N4/)	良好	精良	
9	須恵器	杯	15.3	－	－	口径の1/5	灰色(N5/)	良好	やや精良	
10	須恵器	高杯脚	－	－	－	底径の1/3	灰色(N4/)～ 灰オリーブ色(5Y6/2)	良好	1mm以下の砂粒少	
11	須恵器	高杯脚	－	－	－	底径の1/2	灰色(N5/)	良好	精良	
12	須恵器	甕	－	－	－	全体の3/4	灰色(N4/)	良好	やや精良	
13	須恵器	甕								
14	須恵器	口縁	7.4	－	－	口縁部の3/5	灰色(10Y6/1)　暗灰色(N3/)	良好		
15	須恵器	提瓶	－	－	－		灰色(7.5Y5/1)	良好	やや精良	
16	須恵器	壺	12.6	－	－		明オリーブ灰色(2.5GY7/1)	良好	2～3mmの礫少	
17	須恵器	横瓶	－	－	－	全体の2/3		良好	2mm以下の砂粒少	
18	須恵器	子持器台	－	－	20.7	底径部は完形全体の1/4	オリーブ灰(2.5GY6/1)	良好	精良	
18	須恵器	高杯	9.7	－	－	杯部の1/3	内）灰色(N5/) 外）オリーブ黒色(7.5Y3/1)	良好	精良	
18	須恵器	杯身	9.8	－	－	口径の1/5	灰色(N4/)	良好	精良	
19	須恵器	甕	28.2	－	－	全体の2/3	灰色(N6/)	良好	やや精良	
20	須恵器	高杯蓋	13.5	5.3	－	口径の1/2	灰白色(7.5Y7/1)	良好	精良	
21	須恵器	杯蓋	13.9	4.3	－	ほぼ完形	灰色(7.5Y6/1)	良好	やや精良	
22	須恵器	杯蓋	13.9	4.4	－	完形	灰色(N6/)	良好	1mm以下の砂粒多	
23	須恵器	高杯	14.2	－	－	杯部の1/5	灰色(N6/)	良好	やや精良	
24	須恵器	高杯	16.9	－	－	杯部の2/3	褐灰色(7.5YR5/1)	良好	精良	
25	須恵器	小壺	4.5	10.2	5.8	やや完形	灰白色(5Y7/2)	良好	やや精良	
26	須恵器	皿	15.0	2.4	11.5	ほぼ完形	灰白色(7.5Y7/1)	やや不良	精良	
27	須恵器	杯	12.5	3.1	9.5	ほぼ完形	灰白色(5Y7/1)	良好	精良	
28	土師器	杯	－	－	－		にぶい橙色(7.5YR7/4)	普通	精良	
29	土師器	杯	－	－	－		にぶい橙色(7.5YR7/4)	普通	やや精良	
30	土師器	甕	13.2	－	－	口径の1/7	橙色(5YR6/6)	良好	やや精良	
31	鉄製品									3.8g
32	鉄製品	刀子								12.5g
33	鉄製品	釘								2.0g
34	鉄製品	釘								6.5g
35	装身具	耳環								18.2g
36	装身具	土玉					灰黄褐色			0.3g
37	装身具	土玉					黒褐色			0.4g
38	装身具	土玉					黒色			0.3g
39	石製品	砥石								20.96g
40	土師器	小型丸底壺	－	－	－	全体の4/5	にぶい橙色(7.5YR6/4)	普通	やや精良	

図　　版

1　調査前遠景

2　調査前近景①



3　調査前近景②

図版2

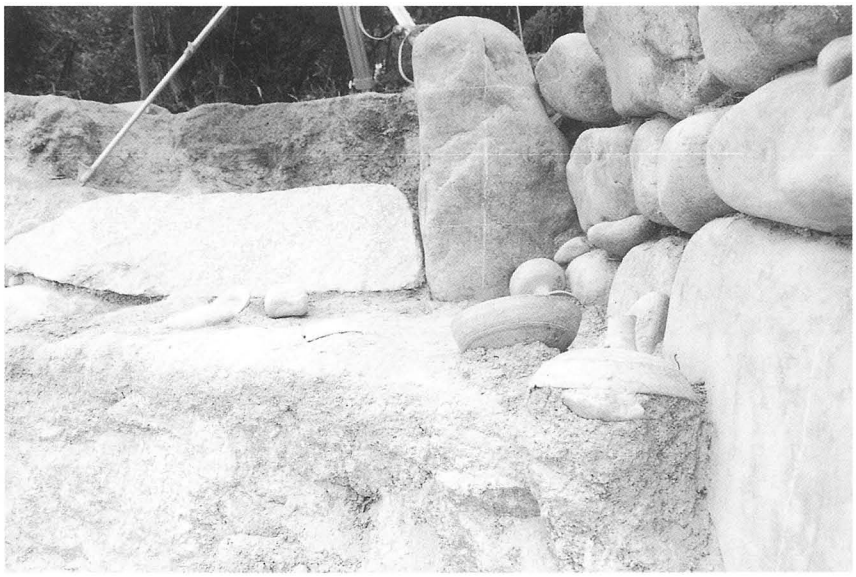
1　周溝状遺構遺物出土状況①

2　周溝状遺構遺物出土状況②

3　調査区東法面埋葬施設検出状況

1　横穴式石室調査状況①

2　横穴式石室調査状況②



3　横穴式石室調査状況③

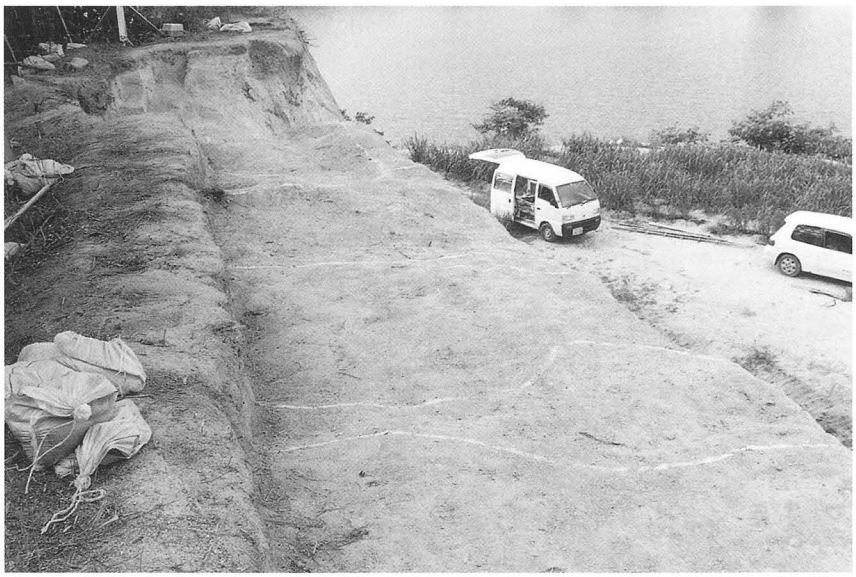
図版4

1　横穴式石室調査状況④

2　横穴式石室調査状況⑤

3　横穴式石室調査状況⑥

1　調査区西側土層墓道

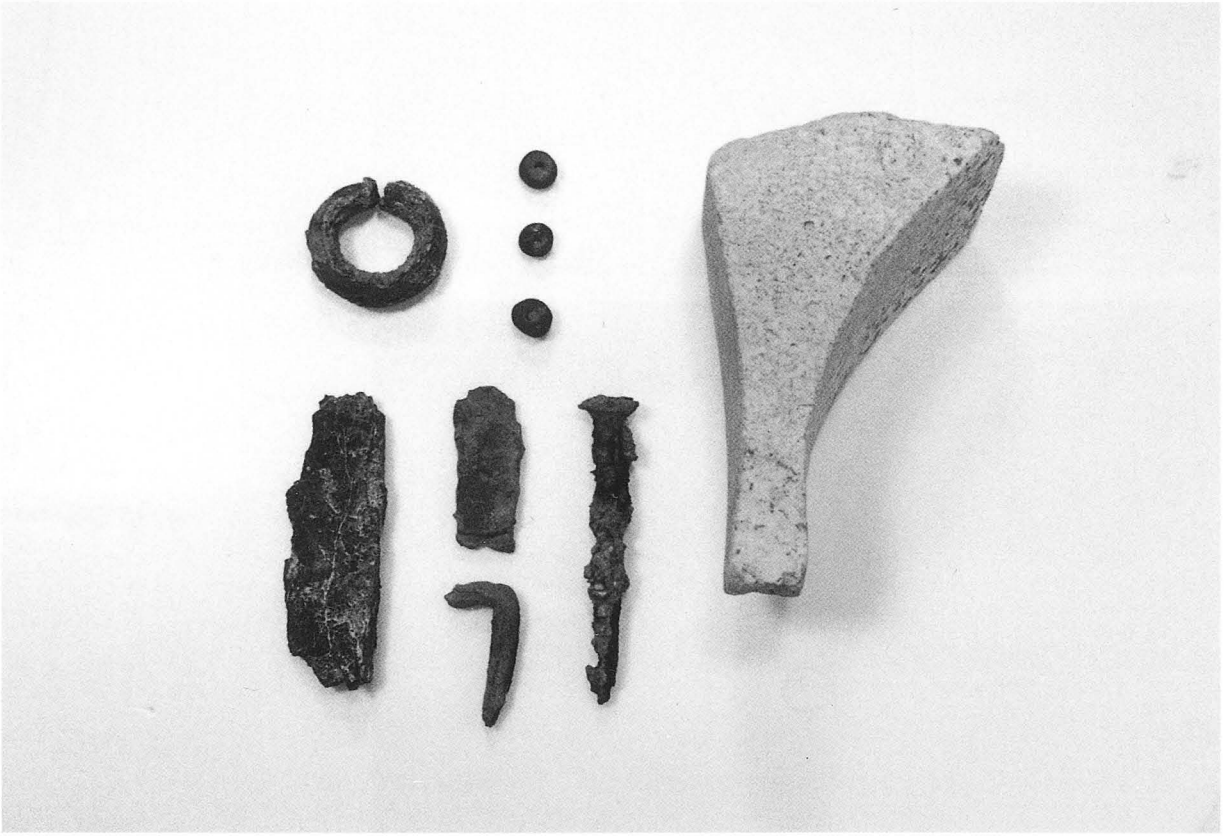


2　調査後近景

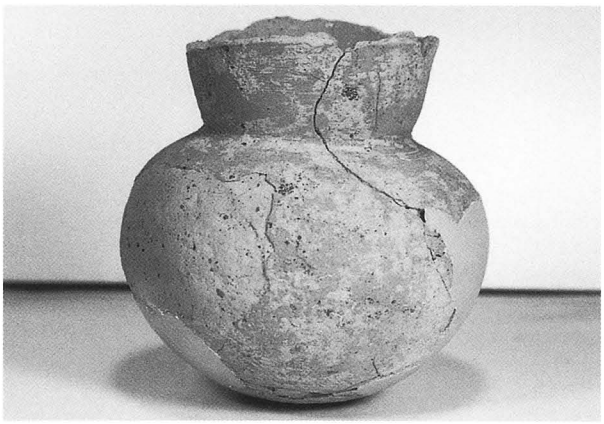
3　調査後崩落土精査状況

図版6

1　出土遺物①（須恵器）



2　出土遺物②（鉄製品他）



報　告　書　抄　録

ふりがな	かんごし5ごうふん
書　名	神　越　5　号　墳
副書名	民間土地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	東かがわ市埋蔵文化財調査報告
シリーズNo.	第２集
編著者名	阿河鋭二
編集機関	大川広域行政組合埋蔵文化財係
発行機関	東かがわ市教育委員会
所在地	〒769-2692　香川県東かがわ市三本松1172番地　TEL0879-26-1238
発行年月日	西暦　2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積	調査原因
かんごし　ごうふん 神越5号墳	かがわけん　ひがし 香川県東かがわ し　しろとり 市白鳥1823	372072		34° 13′ 54″	134° 20′ 24″	2004. 7. 3 ～ 2004. 7. 16	150㎡	民間土地造成事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神越5号墳	古墳	古墳時代後期	横穴式石室 周溝状遺構	須恵器　装身具 石製品　鉄製品	装飾付須恵器を用いた中小規模古墳

民間土地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

神　越　5　号　墳

平成18年３月31日

編　集　　大川広域行政組合

発　行　　東かがわ市教育委員会

〒769－2692　香川県東かがわ市三本松1172番地

（ＴＥＬ）　0879－26－1238

印　刷　　タナカ印刷株式会社